

シテ雙方本人ノ争ハサル物件ノ議論ノ如ク  
無益ナル事務ニ涉ラシメサルカ為メ其争フ  
箇條ヲ指定スルハ有益ナル可シ

第七百一節 仲裁人ノ姓名ヲ記載スル。此  
要件ハ好意仲裁人及ヒ義務仲裁人ニ共通ノ  
モノニシテ何レノ場合ニ於テモ常ニ公ケノ  
名義モナク唯格別ナル指命ニ依ルヲ以テ一  
時裁判官タルノ性質ヲ獲得ス可キ所ノ平人  
ニ關係ス可キモノナリ

第七百二節 我輩ノ見ヲ以テスレハ二通ノ正

本ノ法式ハ仲裁委托契約書ノ為メ必要ノモ  
ノナリ即チ商業ノ事ニ付キ許多ノ證據書ノ  
類ヲ用ユルヲ許ス所ノ規則ハ(商法第三十九  
條、第百九條及ヒ第三百三十二條ノ意)所謂商  
買ノ業ニ適施ス可シ而シテ純粹ニ民事上ノ  
契約ナル仲裁委托契約書ハ及令商業ノ事ニ  
管スルト雖モ此高買ノ業中ニ排列スル下難  
シト見ユ然レハ則チ仲裁委托契約書ハ此時  
以來民法ノ一般ノ原則ニ從フ可キニ過キス  
第七百三節 若シ夫レ丁年ナル社負等ハ會社



ハ證書ニ付キ其相互ノ間ニ釀生ス可キ諸般  
ノ争訟ヲ控訴スルナク裁判セシト契約シタ  
ル片ハ此契約ハ社負中一人ノ其如者ヲ遺シ  
死去セシ場合ト雖モ之ヲ施行ス可キ乎  
論者或ハ幼者若シ不能力ナル場合ハ其後見  
人タル者仲裁委托契約ヲ為ス可キヲ喚起シ  
テ否決セリ前ノ第三十三節參觀而シテ商業  
會社ニ管係有ル社負等間ニ起リ外ル争訟ハ  
豫メ仲裁委托契約ヲ必要トスルニ非スシテ  
唯法律ニ循ヒ仲裁人ヲシテ裁判セシノサル

ヲ得ス然レハ此法律上ノ義務タルヤ雙方本  
人ノ契約ニ關スル添附シタル條目ヲ執行ス  
ル方法ニ從フ可ク且ツ之ヲ修正ス可キニア  
リ蓋シ其義務ハ立法家ノ甚ク能ク解釈スル  
所ナルカ故ニ商法第六十條ニ於テ仲裁委托  
契約書ト雙方本人ノ契約書トノ別ヲ為セリ  
ヤ何トナレハ義務仲裁人ニ於ケルト雖モ亦  
仲裁委托契約ヲ要スレハナリ其他雙方本人  
ハ控訴スルナク仲裁人ヲシテ裁判セシムル  
ニハ一契約ヲ以テ明白ニ集會セサルヲ得ス



商法第五十二條然ルニ仲裁委託契約書ニ非  
スニハ此契約ハ如何ナルモノ乎  
然ル片其雙方亦人ハ仲裁人等ニ一争訟ヲ屬  
セシムルト法律ニ依リ已レノ裁判權ヲ保有  
スルモ其法律上規定セシ限界ヲ超越スル所  
ノ權利ヲ此者等ニ附託スルトヲ問ハス裁判  
權ノ適法ノ順序ニ背戾セサル乎  
若夫レ民法第千百二十二條云フ所ヲシテ能  
カアル又ハ不能力ナル結約者ノ相續人ノ為  
ノ適法ニ取結ビタル契約ハ苟モ之ヲ必行ス

可キ義務アルモノト為ス片ハ法律ハ此趣意  
ヲシテ契約ノ性質ヨリ生スル修正ニ屬セシ  
ム特ニ訴訟法第百十三條云フ所ノ丁年者ノ  
其姓名ヲ手署セシ仲裁委託契約書ハ其幼年  
ナル相續人ヲ餘義ナクセサルナリ  
幼者ノ利益ニ付キ我カ法典訴訟法ハ殊更ニ  
立法家ノ注意ヲ惹起セリ故ニ幼者ノ管涉ス  
ル所ノ諸般ノ訴訟ニ於テハ檢事ヲシテ其意  
見ヲ陳述セシム可ク而シテ又幼者ヲシテ仲  
裁人ノ受諾セシ仲裁ヲ委託シタル事ヨリ免



脱セシムル所ノ右法典ノ第一千十三條ノ規則  
ノ到着スル所以モ亦右ニ基因ス  
此趣意ハ商業ノ為メニ屈曲セルハ真ニ然リ  
訴訟法第四百二十六條云フ所ノ規則ヲ適用  
シタル商法第六十二條ハ或ル會社中一人ノ  
相續人幼年ナルキト雖モ社員等ノ寡婦又ハ  
相續人ヲシテ仲裁委托ヲ為サシム蓋シ此場  
合ハ苟モ商法第五十一條ヲ執行スルコトヲ妨  
障セサルト雖モ仲裁人ノ仲裁言渡ハ終審ノ  
モノタラスレテ第六十三條ニ於テ明ラカニ

之レヲ決定セリ是故ニ總テノ幼者ハ檢事ニ  
依リ防護セラレ、所ノ裁判所ニ於テ已レノ  
保護ヲ受ク可シ然リ而シテ社員等中ノ者死  
去スルキハ此死者ノ契約シタル仲裁ノ委托  
ヨリ生スル法律上ノ義務ヲ破敗セサルモ特  
リ控訴スルナク裁判ヲ受ク可キ契約上人義  
務而已ヲ破敗スト此方法タルヤ法律上ノ義  
務ト契約上ノ義務トヲ分ツテ誠ニ至當ナリ  
トス 千八百二十三年四月  
二月二十一日  
論者或ハ道理ヲ以テ本人等會社ノ證書ニ付



キ仲裁人ノ仲裁言渡ニ對シ控訴ス可キヲ抛棄スル所ノ箇條ト尋常仲裁委託契約書トヲ區別セリ此場合ニ於テハ實ニ委託契約書中ニ記入セル仲裁ニ任スル箇條ハ契約中ニ記載シタル爾餘ノ箇條ト混同セルモノニシテ至タル契約ノ特定ノ箇條ナクンハ他ノ本人等ハ承諾セサリシモノタル所ノ該特定ノ箇條タル可シ故ニ會社證書ノ爾餘ノ箇條ヲレテ分別セシムルニ及ハサルナリ而シテ此時以來結約者等中一人ノ死去ハ他ノ本人等ノ

障害トナル可ク會社證書ヲ消滅センニハ足レリトセス、總テノ相續人ハ其本人等ヨリ發シタル契約ニ依テ束縛セラレ可シ（民法第一千百二十二條）若シ其然ラサル場合ニ於テハ公益ノ為メ巨大ナル事業ヲ成就ス可ラサル所ノ株數ノ差金會社ニ於テハ特ニ概子有益ナル箇條ハ之ヲ適用スルナキニ至ルナラン何トナレハ數年ノ星霜ヲ經ル間斯ク多數ノ株主中ニ常ニ二三ノ幼年者在ラサルマ之レ難ケレハナリ



其他千七百九十年八月二十四日ノ法律第四  
編ノ第六條及ヒ商法第六百三十九條ハ雙方  
本人ヲシテ民事裁判所又ハ商事裁判所ニテ  
始審又ハ終審ニ言渡シタル裁判言渡ヲ控訴  
シ得可キヲ拋棄セシムルトヲ許可セリ義務  
ヲ契約スルトニ能力有ル本人等ノ為シタル  
此拋棄タルヤ結約者及ヒ其相續人ノ為メニ  
正シク義務ヲ必行ス可ク結ビタル契約ヲ組  
成ス可シ(民法第千百二十二條及ヒ第千百三  
十四條)而シテ結約者等ノ彼此ノ幼者ハ契約

ニ一ノ改様ヲモ為サ、ルナリ然ルニ商法第  
五十一條云フ所ハ社負間ニ起生シタル諸般  
ノ爭訟ヲシテ其社負ノ為メニハ義務裁判官  
タル且ツ商事裁判所ニ代フル所ノ仲裁人ノ  
裁判ニ委託セリ而シテ此時以來該仲裁人ノ  
言渡ニ服セスシテ之ヲ控訴ス可キノ拋棄ハ  
民事裁判所又ハ商事裁判所ニ於テ認許セラ  
レタルト同一ノ効ヲ生セサルヲ得ス爰ヲ以  
テ其拋棄ハ社負等ノ幼年ナル相續人タリト  
雖モ必行ス可キ義務タル可シ又商法第六十



三條ハ仮令故障ヲ述フルモノアリト雖モ社  
負ノ相續人ナル幼者ノ利益ノ為メ其後見人  
自ラ契約スル場合ニ適用サル、モノニシテ  
後見人ノ權利ヲ制限セシ規則ノ結果タル可  
ク殊ニ民法第四百六十七條ノ結果タルニ過  
キス然レモ社員自ラ仲裁言渡ヲ控訴ス可キ  
ノ拋棄ヲ為シタルハ此社員ノ幼者ノ為メ  
社員ノ意思ニ從順ス可キ後見人ハ幼者ノ名  
義ヲ以テ一ノ拋棄モ更ニ一ノ契約ヲモ為ス  
トナク當既ニ存スル且ツ必行ス可キ義務有

前記

ル契約ニ依テ束縛セラレテ止マルノミ  
千八百七十八年六月二十日、千八百七十八年五月一日、千  
八百三十五年十一月十日、巴里、千八百三十七  
年五月八日  
覆審院判決

第七百四節 右ト同一ノ決定ハ社員等中ノ一  
人家資分散ヲ為シタル場合ニモ亦適用ス可

第七百五節 然レモ義務仲裁人ニ関スルハ  
右ト同シカラス○前ノ第五百五十六節及ヒ第  
三百十九節參觀

第二條 裁判所ヨリ仲裁人ヲ指命ス



ル事

第七百六節 若夫レ商事裁判所ハ其職權ニ因  
リ仲裁人ヲ命スルルキハ銘々利益ヲ有スル各  
本人ノ負數ニ應シ以テ仲裁人ヲ撰擇ス可シ  
此ニ由テ仲裁人奇數ナルトハ敢テ要トセス  
千八百十四年二月  
二十六日<sup>テ</sup>ユラシ

第七百七節 算計書、證書及ヒ簿冊ノ檢視ヲナ  
ス為メ仲裁人一名又ハ三名ヲ指命ス可キ旨  
ヲ揭示セル訴訟法ノ規則ハ<sup>報</sup>掛<sup>告</sup>仲裁人ニ関  
係ス可クシテ裁判官タル仲裁人ニ関ス可キ

備石

モノニ非ラス 千八百二十五年六月五日、千八  
百十六年四月九日覆審院判決  
若シ茲ニ社負二名アルトスルルキハ裁判所ハ  
仲裁人三名ヲ任スルト得ス若シ其三名ヲ  
任スルモ其無効ヲ致ス可シ 千八百二十七年  
十一月十五日<sup>ボ</sup>  
ルド然シナカラ此無効タルヤ雙方本人仲裁  
人ノ面前ニテ本案ニ係ル論辨ノ趣意ヲ記シ  
タル言渡書ニ満足セシルハ最早取消ノ故障  
ヲ受ケサルモノトス 千八百三十三年七月二  
十日覆審院判決  
第七百八節 社負數名ノ者各々利益ヲ有ス可  
シト主張スルルキハ共同一人利益ヲ果シテ有



スルヤヲ決ス可ク又此数名ノ者ノ指定シ得  
可キ仲裁人ノ負數ヲ定ムルハハキハ獨リ裁判所  
ノ所任タリキ

第七百九節 若夫レ各個ノ指定無キ片争訟ノ  
發起スル場合ハ某ノ者ヲレテ仲裁人ヲ撰擇  
セシム可ク一證書ヲ以テ契約ス可シ蓋シ此  
箇條ハ職權ニ因リ以テ仲裁人ヲ指命スルノ  
所任タル裁判所ノ為メニハ必行ス可キ義務  
タル可シ 千八百十年八月六日巴里

第七百十節 控訴スルナク争訟ハ雙方本人間

角石

ニ勸解諭慰スルノ權有ル仲裁人ニ依テ裁判  
サル、旨ヲ社負等相互ニ契約シタル中ハ此  
契約ハ縱令之レヲ結ビタル後裁判所ノ其職  
權ニ因リ仲裁人ヲ指命セシト雖モ必行ス可  
キ義務アル可シ 千八百十八年七月十五日、千  
八百四十三年八月二十二日  
覆審院判決、千八百三十五年  
五月四日「グレノール」

好意仲裁人ノ場合ハ之レト同シカラス○前  
ノ第五百三十八節參觀

第七百十一節 何町ニ任スル仲裁人ヨリ發シ  
タル争訟ノ判決ヲ訴出スル箇條ハ雙方本人



ノ仲裁人ヲ指命スルヲ付キ恠和一致セサルニ因リ此指命ヲ為シタル此町ノ裁判所ノ裁判ニ委託セラル可シ○此裁判所ハ仲裁人ノ指命ニ係ル訟求ヲ受ケタル本人住所ノ裁判所ニ非ラサルモ敢テ要セス  
千八百三十三年二月六日覆

審院  
判決

第七百十二節 雙方本人ノ一人已レノ仲裁人ヲ命スルノ權利ヲ用フルヲ辭避スト雖モ其權利ヲ用フルヲ希望スル爾餘ノ本人等ノ障害ト為ルヲナシ故ニ裁判所ハ仲裁人ヲ撰

角石

ムヲ辭避スル者ノ為ノ其職權ニ因リ以テ其指命ヲ為サルヲ得ル而レテ商法第五十五條云フ所ノ仲裁人ノ指命ハ雙方本人相互ニ協和ヲ以テ之ヲ為ス可キ旨ヲ記載セス然ルニ各社員ノ方ニ付キ各個ニ仲裁人ノ任命ヲ要ス可キハ此條ノ文面及ヒ性神ニ反對ヲ生ス可シ其故何ソヤ仲裁人ヲ指命スルハ片務契約ニ依テ適法ニ證セラルレハナリ是ヲ以テ指命ノ權利ハ本人等ノ各自ニ屬シ他人ノ意欲ニ関セサルモノトス



之レニ反スル規則ハ故障ヲ述フ可キ一ノ正  
當ノ理由モアラサル仲裁人ノ仲裁ニ委託セ  
シ事務ヲ遂サクル方法ヲ本人ニ與フルニ付  
キ不都合ヲ生ス可シ

論者或ハ評價人タル仲裁人ヲ任スルニ管  
スル訴訟法第四百二十九條ノ規則ヲ論拒ス  
ルト雖モ此論取ルニ足ラス何トナレハ此任  
命ハ全ク種々ノ趣意ニ依テ管理サル、モノ  
ニシテ裁判官タル仲裁人ノ方法ヨリ爾餘ノ  
方法ニ適施ス可ラス  
千八百十五年六月五日  
千八百十六年四月九日

及ヒ全十日覆審院判決、千八百二十三年四月  
二十一日「リオリオン」千八百二十七年十一月二十  
五日「ボルドー」千八百三十三年一月十一日「メ  
ッ」千八百八十三年七月八日「モンパリエ」  
千八百九十三年八月  
二十日「ルアー」

### 第七百十三節

然レモ共同利益ヲ有スル社員

數名中ノ一人カ其共同社員ニ依テ擇マレタ  
ル仲裁人ヲ任スルニ承諾スルヲ辭避セシ  
キハ仮令其多數ノ者ニ依テ撰擇セラレ、ト  
雖モ裁判所ハ總テノ共同社員ノ為メニ仲裁  
人ヲ任セサルヲ得ス此ニ由テ考フルニ夥多  
ノ仲裁人ニ依テ或ル裁判所ニ單ナル利益ヲ



現出セラル、丁又他一方ニ付テハ何レノ法  
文タリトモ社員等中ノ幼年者ヲシテ大數ノ  
者ノ撰擇ニ從フ可ク檢束セシメサル丁等ハ  
誠ニ至當ト云フ可ラス  
千八百十六年四月  
十日覆審院判決

第七百十四節 不能力ナル仲裁人若クハ仲裁  
委託契約書中ニ指示シタル順序外ノ仲裁人  
ヲ指命セシ本人ハ恰モ之ヲ指命セサル如ク  
見做サル可シ而シテ裁判所ハ本人ニ代テ仲  
裁人ヲ指命ス可シ  
千八百十年八  
月六日巴里 ○千八百十  
五年六月五日、千八百十六年四月九日覆審院

備石

判決書參觀

第七百十五節 各社員協議ヲ遂ケ以テ指命シ

タル仲裁人中ノ一人死去スル場合ハ其死去  
シタル者ノ代人ヲ要スル而已ナラス尚ホ全  
仲裁人ヲ更ニ任スル丁ヲ要ス可シ  
千八百十  
年五月三

十日「ゲリユキ  
スゼール」

雙方本人ノ撰擇ハ其信任ヲ受クル種々ナル  
人ノ分限ノ一致ニ依テ之ヲ確定セラル、丁  
ヲ得可シ蓋シ此基礎ハ仲裁人中ノ一人ノ死  
去ニ依テ破毀セララル、故ニ雙方本人ニ新



規ノ撰擇ヲ為ス、一ノ自由ヲ得セシムルハ至  
當ト云フ可シ。○前ノ第二百六十節參觀  
又雙方本人新規ノ仲裁人ヲ指命スル一ニ付  
キ其協議セサル場合ハ裁判所ニテ仲裁裁判  
所ヲ組成ス可シ然レバ雙方本人ハ死去セル  
仲裁人ノ代負ヲ任スル而已ニテ爾餘ノ仲裁  
人ヲ保存スル一ヲ得可ク又何レノ場合ヲ論  
セス其仲裁人ヲ再ヒ任命スルヲ得可シ而シ  
テ裁判所ニ於テモ亦之レト等シク其仲裁人  
ヲ擇ム一ヲ得可シ

角石

第七百十六節 瑞西國ニ於テ仲裁委託契約ヲ  
結ビタル片ハ此國ノ法律ヲ遵守シ以テ仲裁  
人ヲ指命セサルヲ得ス 千八百三十年三月十九日巴里

第三條 義務仲裁人ト成ルヲ得可キ

者

第七百十七節 民權ヲ享有スル總テノ國士タ  
ル者ハ前ノ第九十六節及ヒ以下ニ定メ有  
ル規則ニ循ヒ義務仲裁人ニ擇マル一ヲ得  
可シ

第七百十八節 然レナカラ此仲裁人ノ公ケノ







官ノ要ムル所ナル國民タルノ權利ヲ享  
有スルハ義務仲裁人ノ職務ヲ委托セ  
ラレタル者ニ就テモ亦是非トモ之ヲ要  
メラル、ヲ得可シ

第七百二十節 政府ノ允許ヲ受ケ佛蘭西ニ其  
住所ヲ定メタル外國人ニ就テモ亦右ト同様  
ナリトス 民法第十三條 此ニ由テ即チ民權ヲ  
行フニハ行政ノ職就中裁判官ノ職ヲ行フカ  
為メノ允許ヲ受クルモ足レリトセス尚ホ亦  
佛蘭西人タルノ分限ニ附着セル民權ヲ享有セ

角石

サル可ラス

第七百二十一節 第二 復權セサル家資分散  
人即チ此者ハ苟モ商事裁判所ノ裁判官ト成  
ルヲ得ス故ニ又商事裁判所ニ代フル所ノ  
裁判官ト成ルヲ得ス

第七百二十二節 商事裁判所ハ其職權ニ因リ  
仲裁裁判ニ管渉スル裁判官ノ一人ヲ以テ仲  
裁人ニ任スルヲ得ス又本人ノ作為シタル  
辞令書ヲ附與スルヲ得ス  
千八百四十二年二月五日ア  
ルゼ ○然レナカラ前ノ第二百十二節及ヒ以



下參觀

第三款 義務仲裁人ノ權利

第一條 此權利ノ廣狹

第七百二十三節 義務仲裁人ノ權利ハ會社ノ  
 爭訟ヲ判決ス可キノ權ヲ任セラル、所ノ法  
 律ニ依テ規定セラル可シ  
 夫レ此裁判權ヲ制限ス可キハ本人又ハ裁判  
 所ニモ屬セサルナリ  
 特ニ商事裁判所ハ社員間ノ爭訟ヲ仲裁人ニ  
 廻送シ以テ單純ナル報告仲裁人ノ職務ニ其

角石

權利ヲ減少スルヲ得ス

爰ヲ以テ仲裁人ハ縱令セ裁判所ヨリ報告ヲ

為ス而已ヲ請求セラレ且ツ隨テ裁判所ニテ

裁判スルノ權ヲ保有スル時ト雖モ訴訟ヲ裁

判セサルヲ得ス 千八百十年七月五日巴里

第七百二十四節 會社ニ管セサル加様ナル爭

論ヲ記入シタル言渡書ハ上等法院ノ調査ヲ

適カレサルモノナリ而シテ事柄ノ證明ハ充

分ナリト雖モ其言渡ノ名義ハ覆審院ニテ評

定セラル可シ



第七百二十五節 然レ氏雙方本人ハ法律上義務仲裁人ニ裁判ヲ屬セレメタル事柄ヨリ爾餘ノ事柄ヲ以テ此者ノ權利ヲ擴張スルトハ毫モ差支ナカル可シ

唯仲裁人ハ雙方本人ノ裁判權ヲ保有スル所ノ事柄ニ付テハ最早義務仲裁人ノ性ヲ帯ヒサルモノニシテ好意仲裁人タル可シ

第七百二十六節 斯ク仲裁人ノ權利ノ廣狹ヲ定ムルハ之ヲ防護スルニアラスシテ却テ要求スルニ在リ○仲裁人若シ事情理由ヲ識別

セシ片ハ本案ト雖モ之ヲ裁判スルトヲ得可シ而シテ其仲裁人ノ言渡書ハ其自ラ認メタル調書ニ本案ノ問題ヲ説述スルナク假定ノ問題ニ係ル争訟ヲ収結セル旨ヲ明記スル時ト雖モ攻撃セラレサルナリ  
千八百三十八年十一月二十日巴里

第七百二十七節 共分會社ニ管スル争訟ヲ判決ス可ク指命セラレタル仲裁人ハ社負中一人ノ計算ヲ確定ニ判決シ以テ最モ完全ノ教諭書ノ差出スニ至ル迄他ノ者ノ計算ヲ判決



スルヲ得可シ 千八百三十三年五月三十一日

第七百二十八節 好意仲裁人ノ權利ノ廣狹ニ  
管スル規格ハ亦義務仲裁人ニ之ヲ通施ス可  
レ○前ノ第二百二十八節乃至第二百三十六  
節參觀

第七百二十九節 故ニ義務仲裁人ハ左ノ條件  
ヲ處分スルヲ得可シ

第一 仲裁人ノ面前ニ於テ論スル所ノ問  
題カ此者ノ管轄ノ分界ヲ越ヘタルカ為  
メ尋常裁判所ニ其廻送スルヲ求ムル訴

ヲ裁判スル事 千八百三十三年五月八日  
覆審院判決、千八百八十八年三月  
月二十五日及七月二十五日、  
八百十三年一月二十五日、  
チユラシ

其他前ノ第二百二十八節參觀

然レ此其義務仲裁人ハ證書類ヲ驗真スル  
ノ手續ヲ為スタメノ分限ニ代フル所ノ商事  
裁判所ナルニ非ラス 即チ民事裁判所ニ雙方  
本人ノ訴ヲ廻送スルヲ付テハ二箇ノ場合  
ヲ要ス可シ○其他前ノ第二百三十七節參觀  
第七百三十節 第二 會社ニ屬スル動産ノ分  
派ニ於ケル如ク不動産ノ分派ノ手續ヲ為ス



事但シ義務仲裁人ハ分派ヲ為ス可ラサル品  
物ノ場合ハ之ヲ糶賣ニスルノ手續ヲ行フカ  
為メ初告裁判所ニ雙方本人ノ訴ヲ廻送ス可  
シ千八百三十二年七月  
三十一日覆審院判決

第七百三十一節 第三 禁錮ヲ言渡ス事即チ

義務仲裁人ハ法律上禁錮ヲ命スルノ權ヲ得  
及ヒ商事裁判所ノ裁判官ト同様ノ權利ヲ享  
有ス可シ千八百十一年十一月五日覆審院判  
決、千八百十二年三月二十日巴里

○其他前ノ第二百三十九節參觀

第七百三十二節 第四 雙方本人ノ一方ノ請

求ニ依リ仲裁言渡書ヲ解釋スル事

若夫レ仲裁委託契約書ニ定メタル期限カ終  
了セサル片ハ然ラス即チ此場合ニ於テハ義  
務仲裁人ノ權利ハ止息ス可シ故ニ雙方本人  
ヲ裁判スル為メノ權利ヲ有セサルナリ但シ  
新規ノ仲裁委託契約書ヲ以テ此者ニ其權利  
ヲ附與スル片ハ格別トス

第七百三十三節 然シナカラ義務仲裁人ノ場

合ニ於テ裁判言渡書ニ記入セラル、錯誤ヲ  
更改修正スルノ訴ハ是非トモ之ヲ言渡シタ



ル仲裁人ニ為サ、ルヲ得ス若シ其仲裁人事  
故有ル片ハ他ノ仲裁人ニ訴フ可シ此ニ由テ  
考フルニ社負間ノ争訟ヲ裁決ス可キニ関ス  
ル片ハ商事裁判所ハ其裁判ヲ為ス一ヲ得ス  
千八百十五年三月二  
十八日覆審院判決  
是故ニ終審ニ裁判ヲ言渡シタル仲裁人カ此  
言渡ニ對スル缺點及ヒ錯誤ニ付キ判決セシ  
所ノ言渡書ハ鑑定人ノ單一ナル報告書ニハ  
之レ非ラスト雖モ其言渡書ハ縱令仲裁委託  
契約書ノ期限了ハリタル後更ニ委託契約ノ

無キ嚮キノ言渡書ト同一ノ権力ヲ以テ為シ  
タル真箇ノ言渡書ナリトス  
千八百二十六年  
七月十三日「ボ  
下  
此場合ニ於テ仲裁人ノ取扱フハ仲裁委託契  
約書ノ期限外ニ裁判權ヲ延長スルニアラス  
即チ其仲裁人ハ已レノ言渡書中ニ計算ノ一  
ヲ記入シ若シ其計算ニ誤算又ハ缺點有ルヲ  
更改ス可ク裁判所ニ屬スル所ノ權利ヲ用フ  
ルモノトス  
訴訟法第五百四十一條  
第七百三十四節 若夫レ仲裁人ハ仲裁委託契



ル仲裁人ニ為サ、ルヲ得ス若シ其仲裁人事  
故有ルキハ他ノ仲裁人ニ訴フ可シ此ニ由テ  
考フルニ社負間ノ争訟ヲ裁決ス可キニ関ス  
ル片ハ商事裁判所ハ其裁判ヲ為スヲ得ス  
千八百十五年三月二  
十八日覆審院判決  
是故ニ終審ニ裁判ヲ言渡シタル仲裁人カ此  
言渡ニ對スル缺點及ヒ錯誤ニ付キ判決セシ  
所ノ言渡書ハ鑑定人ノ單一ナル報告書ニハ  
之レ非ラスト雖モ其言渡書ハ縱令仲裁委託  
契約書ノ期限了ハリタル後更ニ委託契約ノ

無キ嚮キノ言渡書ト同一ノ権力ヲ以テ為シ  
タル真箇ノ言渡書ナリトス  
千八百二十六年  
七月十三日「ボ  
ル」  
此場合ニ於テ仲裁人ノ取扱フハ仲裁委託契  
約書ノ期限外ニ裁判權ヲ延長スルニアラス  
即チ其仲裁人ハ已レノ言渡書中ニ計算ノ  
ヲ記入シ若シ其計算ニ誤算又ハ缺點有ルヲ  
更改ス可ク裁判所ニ屬スル所ノ權利ヲ用フ  
ルモノトス  
訴訟法第五百四十一條

第七百三十四節 若夫レ仲裁人ハ仲裁委託契



約書ニ依リテ社負間ニ成立スル會社ノ名義ニ付キ該社負間ニ生シタル又ハ生ス可キ諸般ノ爭訟ヲ裁判スルノ權ヲ任セラレタル片ハ無論或ル箇條ノ仲裁言渡ヲ為シタル後猶ホ委托契約書ノ期限了ハラサレハ更ニ其他ノ箇條ノ言渡ヲ為スヲ得可シ  
千八百三十一年十一月二十一日覆  
審院判決

第七百三十五節 仲裁言渡ハ當然保證人ヲ備ヘ以テ反ニ之ヲ執行ス可シ  
三十九條ノ意  
訴訟法第四百  
前ノ第二百四十一節及ヒ以下參觀

角石

第二條 義務仲裁人ノ權利ノ時限○  
延長

第七百三十六節 仲裁人ノ有スル權利ハ或ハ仲裁委托ノ事務ヲ取扱フ為ノ定メタル期限ノ終了或ハ仲裁人中一人ノ廢退故障ヲ述ヘラル、一、死去、辭職、他行或ハ差支有ルノ結果ニ依テ止息ス可シ

第七百三十七節 仲裁人ノ說ニ個以上對立スル一ハ義務仲裁人ノ職ヲ止メシメス之レニ及スル前ノ第三百十三節ヲ參觀ス可シ而シ



テ此場合ニ於テ仲裁委託契約書ニ依テ別ニ  
第三ノ仲裁人ヲ指命セサル片ハ最初ノ仲裁  
人ハ第三ノ仲裁人ヲ指命ス可シ若シ其撰任  
ノ事ニ付キ最初ノ仲裁人ノ意見互ニ異ナル  
片ハ商事裁判所ヨリ之ヲ撰任ス可シ  
商法第六十條  
○後ノ第七百六十四節參觀

第七百三十八節 期限ノ終了スル事○凡ソ仲  
裁ヲ言渡ス可キノ期限ハ仲裁人ヲ任命スル  
際ニ當リ雙方本人ニ依テ之ヲ定メラル可シ  
若シ其期限ヲ定ムルトニ付キ雙方本人ノ協

角石

議セサル片ハ又商事裁判所ヨリ之ヲ定ムル  
モノトス  
商法第五十四條

第七百三十九節 若シ又雙方本人若クハ裁判  
官此期限ヲ定メサル片ハ第一千七條ノ意ニ基  
キ三箇月ノ期限ヲ以テスル乎

論者或ハ總テ特別ノ法律ハ通常法律ニ背反  
セリト云ヒ否決セリ而シテ其他商法ハ訴訟  
法ニ先タ、ル、カ故ニ總テ判決ス可キ理由  
ヲ研究ス可キハ獨リ第一ニアリ然ルニ雙方  
本人若クハ裁判所ヨリ定メタル期限了リテ



後仲裁人ヲシテ仲裁ヲ言渡ス<sub>1</sub>ヲ禁セシム  
ル所ノ何レノ法文ニモ出會セサルナリ  
又好意仲裁人ノ事ニ付テハ雙方本人ハ自己  
ノ撰任セシ裁判官ニ依頼スル代ニ一時當然  
ノ裁判官ニ委子ルカ故ニ仲裁人ノ權利ハ仲  
裁委託契約書ノ期限ト俱ニ終了ス可キハ至  
當ト云フ可シ然レモ義務仲裁人ノ場合ハ之  
レト同一ノ判決ス可キ理由ハ最早成立セス  
即チ雙方本人ハ常ニ仲裁人ニ訴フル<sub>1</sub>ニ餘  
義ナクサル可シ而シテ之レニ及スル方法ノ

附石

効能ハ諸費用ヲ増加シ及ヒ本人等ヲ分離セ  
シムル争訟ヲ空シク引延セシムルナラン  
第三千二百三十三條參觀

此ニ由テ是レヲ觀ルニ一方ニ從ヘハ仲裁人  
ノ為メ定メタル期限ノ了ハル<sub>1</sub>ハ商事裁判  
所ニ出訴セサルヲ得スト  
千八百十七年五月  
二十一日<sub>1</sub>リモ<sub>1</sub>迄

○他ノ一方ニ從ヘハ仲裁人ヲ任シタル言渡  
書ニ期限ノ定メナキ<sub>1</sub>ハ該仲裁人ハ必要ト  
信スル期限ヲ自ラ定ムルヲ得可シト  
千八百  
二十六

年八月十一日  
グレノイブニル



然レ氏論者或ハ道理ヲ以テ可決シテ左ノ如ク答ヘリ

若夫レ第千十二條ノ規則ハ商法ニ本文トシテ之ヲ再ヒ掲載セサルモ其義務仲裁人ニ不適當ナルヲ断決スルヲ要セス當此而已ナラス商法第十八條ニ掲クル所ハ會社ノ契約ハ民法、商法及ヒ雙方ノ約束ヲ以テ之ヲ定ムト有レトモ人或ハ參議院ニ於テ認可シ而シテ千八百七七年九月一日民撰議院ニ差出シタル理由ノ報告書ヲ讀ムハ若シ商業ノ諸會

社中ニ爭訟ノ發起スルハ其裁判ハ法律上仲裁人ニ之ヲ任ス而シテ訴訟法ニ記載セル仲裁人ニ係ル諸規則ニ管セス法律ハ特別ナル方法ヲ規定ストアリ然レハ則チ第千十二條ハ好意仲裁人ノ如ク義務仲裁人ヲ管理セサルカ為メ適法ノ例外法ヲ要ス可ク有リ度モ却テ定期限ノ終ハルハ仲裁人ノ裁判官タルヲ止ムル所ノ定期限ニ仲裁人ノ有スル權利ノ限界ヲ立ルノ義務ハ訴訟法第七條ニ於ケルカ如ク商法第五十四條ニ於テ



完全タル文詞ニ依リテ命セラル可シ然リ而  
レテ雙方本人ハ仲裁人ニ依テ裁判サル、  
ニ檢束セラル、ハ敢テ要トセス即チ此義務  
ト仲裁委託契約トヲ混同ス可ラス又仲裁人  
ノ有スル所ノ權利ノ消滅ハ尋常裁判所ニ訴  
訟ヲ為スタメノ一理由ト成ルナシ之レニ  
反シテ新規ノ仲裁人ヲ指命スルハ最モ必  
要ナリトス此ニ由テ別段理由アラサルモ雙  
方本人ハ仲裁人ノ權利ヲ延長スルヲ急ク  
可シト雖モ若シ之ヲ為サ、レハ其仲裁人ハ

定メ有ル時間ヲ以テ任セラル、裁判官タル  
ノ性ヲ喪失スルナル可シ而シテ其言渡ヲ必  
行セシムルヲ得サルナリ  
千八百二十三年  
四月二十二日  
覆  
審院判決千八百十八年六月二十二日  
「ボルド  
」千八百二十三年四月十三日  
「ツル  
」千八百二十三年五月二日  
覆審院判決

第七百四十節 故ニ仲裁言渡書又ハ仲裁委託

契約書ヲ以テ定メタル期限已ニ終了シテ後  
仲裁人ノ為ス所ノ言渡ハ之ヲ廢棄ス可シ

千八百二十一年七月二十一日及千八百三十年  
七月二十八日「ブリュクセル」千八百二十年  
六月二十九日「ブリュクセル」千八百十七年五  
月二十一日「リモール」千八百二十年四月二



十五日  
リオン

第七百四十一節 凡ソ三箇月ノ期限ハ仲裁人  
ヲ任スル所ノ證書又ハ其言渡書ノ日ヨリ之  
ヲ起算ズルモノナリ  
雙方本人ハ其仲裁人ニ覺書及ヒ證書類ヲ差  
出シタル日ヨリ起算スル而已ニ非ラス實ニ  
商法第五十九條云フ所ニ從ヘハ期限ヲ更ニ  
延ハス<sub>1</sub>無キ<sub>1</sub>又ハ證書類ヲ差出ス為メノ  
新規ノ期限ノ終ハル<sub>1</sub>中<sub>1</sub>ハ仲裁人ハ簡單ナル  
證書類及ヒ覺書ニ付キ裁判ス可シト  
千八百  
十一年

角石

三月八日  
チユラン

○特別ノ場合ニ於テハ仲裁裁判所  
ヲ編成セシ言渡書ニ依リ定メラレタル期限  
ノ盡キタル後雙方本人ノ二名共ニ好意ヲ以  
テ仲裁人ニ其證書類ヲ差出シタレハ以テ默  
許ニ期限ヲ延長スルノ意思タル<sub>1</sub>ヲ表述ス  
ルモノナリ○後ノ第三百二十六節參觀

第七百四十二節 然シナカラ裁判所若クハ雙  
方本人ハ特別ノ箇條ヲ設ケテ仲裁人ノ其職  
務ヲ承諾シタル日ヨリ期限ヲ算始ス可シト  
契約レ又ハ之ヲ命スル<sub>1</sub>ヲ得可シ前ノ第三



百十二節參觀(而)レテ又證書類ヲ差出シタル  
日ヨリ期限ヲ算始ス可シト契約シ又ハ之ヲ  
命スルヲモ得可シ  
雙方本人中一人ノ其證書類ヲ差出スヲ以テ  
足レリトス即チ然ラサレハ其相手方決シテ  
證書類ヲ差出タサスレテ仲裁言渡ヲ妨害ス  
ルハ蓋シ其意欲ニ關ス可シ此レハ許ス可  
ラサル所トス  
其他證書類ヲ差出シタル日附ハ仲裁人ノ明  
言ヲ以テ之ヲ證據立ツ可シ

第七百四十三節 仲。裁。人。ヲ。廢。退。ス。ル。ノ。義。務  
仲裁人ヲ廢退スルニハ好意仲裁人ト同様ノ  
規則ニ依循ス可シ(前ノ第二百五十一節及ヒ  
以下參觀)此ニ由テ考フルニ法律ハ是ノ區別  
ヲ立テサルモ商法ノ明文ニ反背スルハ好  
意仲裁人ニ管スル原則ハ義務仲裁人ニ之ヲ  
適用ス可キトハ既ニ論說セリ○共和八年「フ  
リユク」チドール月十三日覆審院判決  
然リト雖モ新規ノ仲裁人ヲ撰擇スルトニ付  
キ雙方本人ハ其協議シタル上ニ非サレハ從



前ノ仲裁人ヲ廢退スルヲ得ス何トナレハ  
裁判所ハ其他ノ仲裁人ヲ指示スルヲ餘義  
ナクサレサレハナリ而シテ從前ノ仲裁人ヲ  
廢退スルモ雙方本人ヲシテ其爭訟ヲ管轄異  
ナル商事裁判所ニ訴出セシムルヲ許サ、ル  
カ故ニ前ノ第四百四十六節參觀(雙方本人ハ  
裁判サル、丁能ハサルニ至ル可シ「ロクレ」  
氏商法第六十四條  
第四百十四節 仲裁人ノ故障ヲ述ヘラル、  
事○仲裁人ニ對シ故障ヲ述フルニハ好意仲

角石

裁人ト同様ノ規則ニ依循ス可シ(前ノ第二百  
七十八節及ヒ以下參觀)

第四百四十五節 故ニ義務仲裁人ハ尋常裁判  
官ノ如ク訴訟法第三百七十八條ニ明記シタ  
ル理由ニ依ルニ非サレハ雙方本人ヨリ故障  
ヲ述ヘラル、丁ナシ  
千八百三十二年ニ  
月八日覆審院判決

第四百四十六節 然シナカラ雙方本人ノ撰擇  
セサル義務仲裁人ニ對シ故障ヲ述フルハ裁  
判官ニ對シ故障ヲ述フル如ク其指令ノ前ニ  
生シタル理由ニ依リ之ヲ為ス丁ヲ得可シ  
訟許



法第百三十八條

第七百四十七節 然レ氏社員等自ラ其仲裁人ヲ撰任シタルハ仲裁委託契約ヲ結ビタル後ニ發起シタル理由ニ因ルニ非サレハ此者ニ故障ヲ述フルトヲ得ス  
千八百三十八年八月十八日ツールズ

第七百四十八節 左ノ場合ハ仲裁人ニ對シ故障ヲ述フルノ充分ナル理由ナルニ非ラス

第一期ノ終了ニ依テ權利ノ消滅シタル仲裁人ト同シキ新規ノ仲裁人ナル場

備石

合 千八百二十五年八月二十九日

第二 嚮キノ事務ニ於テ雙方本人中一人ヨリ酬金ヲ受ケタル仲裁人ニ付キ其指

命ノ前仲裁人ノ如キ所為 千八百三十一年二月八日覆

審院判決

第七百四十九節 仲裁人ニ故障ヲ述フルハ其

本人ニ送達シタル文書ヲ以テスルニ非ス商事裁判所ノ書記局ニ送達シタル文書ヲ以テ

ス可シ 千八百三十九年四月二十五日 巴里 ○其他前ノ第二百

九十二節 參觀



第七百五十節 延期ヲ要求スルノ付キ為シタル故障申述ハ若シ仲裁人主タル申述ノ目的タル延期ヲ與ヘタル片ハ無効ヲ致ス可シ  
千八百三十九年四月二十五日巴里

第七百五十一節 仲裁人ノ死去○仲裁人中一人ノ死去ハ仲裁人ニ依テ裁判サル、雙方本人ニ拂フ可キ義務ヲ消散セサルモノトス○前ノ第三百十七節及ヒ以下參觀  
然レモ若シ仲裁人雙方本人ニ依テ擇マレタル片ハ唯死去シタル仲裁人ノ代負ヲ要セサル

前

ルト雖モ總テノ仲裁人ヲ更ニ任スルヲ要ス可シ  
千八百三十九年五月三十日  
○前ノ第二百六十節參觀

第七百五十二節 仲裁人ノ辭職及ヒ他行○仲裁人ノ其職ニ任シタル後他所ニ赴去スルハ好意仲裁人ノ如ク之ヲ為スヲ得ス○前ノ第二百六十六節及ヒ以下參觀

第七百五十三節 凡ソ仲裁人ハ相互ニ爭フ社負ニ對シテ義務仲裁人ナルモ仲裁人ノ為メ撰擇セララル、者ニ對シテハ然ラス故ニ該者



ハ已レニ委託セララル、職ヲ受諾スルノ前又  
ハ之ヲ受諾シタル後ト雖モ諸事其儘ナルキ  
ハ其職ヲ辞避スルヲ得（民法第二千七條）而  
シテ此レハ詐欺アル法律ノ規則ヲ為ス、必  
要ナル裁判所ノ等級ヲ充タシ以テ真箇ノ裁  
判官タル仲裁人ハ若シ裁判權ニ監定ノ屬ス  
ル充分ナル理由ヲ有セサルハ裁判ヲ取消  
ス、一ヲ得サル、一、訴訟法第千十二條ハ好意仲  
裁人ノ事而已ヲ掲載セシ、一等ヲ人或ハ誹議  
スルト雖モ取ルニ足ラス

明確ナル法文ハ獨リ國士タル者ニ或ル職務  
ヲ行フ、一ノ義務ヲ負任セシム可シ今一例ヲ  
舉クレハ陪審、如キ是レナリ然レモ此法文  
ハ仲裁人ノ為メニ成立タ、スレテ其成立ス  
ルノ充分ナル理由モ亦之レアラス  
千八百十  
年八月二  
十日「一」  
キユスゼール

第七百五十四節 一旦撰任セラレタル仲裁人  
ノ受任ヲ拒絶スル、一又ハ他行スル、一等ノ結  
局ハ如何

好意仲裁人ニ於テハ其奪取シタル争訟ヲ復



夕尋常裁判所ニ返還ス可キニアリ○前ノ第  
二百六十節參觀

義務仲裁人ニ付テハ之レト然ラス雙方本人  
ハ尋常裁判所ニ出訴スルヲ得ス而シテ双  
方本人ノ争訟ノ性質ニ從ヒ更ニ仲裁人ニ之  
ヲ屬セシムルトニ逼迫セラレ可シ然レモ特  
別ナル箇條ヲ包含スル委託契約書ハ畢竟法  
律ニ背クヲ以テ是非トモ解了ス可シ故ニ雙  
方本人ハ仲裁人ニ雙方本人間ニ勸解開慰ヲ  
為ス可キノ權アルヲ定メ以テ裁判スルヲ

ノ權利ヲ與ヘタル場合ニ於テハ此契約ハ仲  
裁人ノ本人等ヨリ信任ヲ受クル所ナルヲ以  
テ趣意ヲ記ス可キモノニシテ若シ仲裁人中  
一人ノ死去又ハ他行等ノ到着スルハ必行  
ス可キ義務ヲ止息ス可シ  
千八百七十二年  
五月廿五日  
但シ仲裁委託契約書中ニ記入セル明確ナル  
箇條ニ付テハ格別トス故ニ仲裁人其同僚ノ  
死去又ハ他行スル前ニ為シタル吟味手續ニ  
付テノ書類ハ無効ノ如ク看做サル、モノナ  
リ○仲裁委託契約書ハ一モ効力ヲ生セサル



モノニシテ好意仲裁人ノ場合ニ於ケル如ク  
廢棄セラル可シ而シテ雙方本人ハ夫張り仲  
裁裁判所ニ從フ可シ故ニ該裁判所ノ欠缺ノ  
場合ハ評議裁判官ニ依テ命セラル、新規ノ  
裁判所ヲ編成セサルヲ得ス

第七百五十五節 雙方本人中一人ノ死去ハ如  
年ナル相續人ノ在ス中ト雖モ仲裁人ノ職ヲ  
止息セス商法第六十三條○前ノ第三百十八節參觀  
第七百五十六節 社員中一人ノ家資分散ヲ為  
シタル中ト雖モ亦右ト同様ナリト千八百三十一

角石

年七月四日「ポルド」千八百  
三十三年八月七日巴里 ○其他前ノ第三  
百二十節參觀

第七百五十七節 期限ヲ延長スル事○雙方本  
人ハ義務仲裁人ノトニ付キ好意仲裁人ニ関  
スル如ク仲裁人ノ其職ヲ行フ可キ期限ヲ延  
長スルトヲ得可シ○雙方本人ハ仲裁人ノ其  
職ヲ行フ可キ期限已ニ了リタル後ト雖モ之  
ヲ延長スルトヲ得可シ此場合ニ於テハ從  
前ノ仲裁委託契約書ノ期限間為サル、諸事  
ニ付テハ和解ノ契約有リ



第七百五十八節 延期ハ黙許タルヲ得可シハ千

百二十七年二月九日「ポルド」 ○前ノ第三百二十五節參觀

第七百五十九節 特ニ此延期ハ若シ仲裁委託

契約書ノ期限ノ終了シタル後本人仲裁人ノ

面前ニ出席シ引續キ事務ヲ扱フキニ要ス可

キモノトス ○前ノ第三百二十六節及ヒ第七

百四十一節參觀

第七百六十節 其他延期ヨリ生スル事情ハ裁

判所ノ鑑定ニ任ス可シ

第七百六十一節 商事裁判所ハ雙方本人ノ一

角石

方ノ意思ニ及シ他一方ノ要求シタル延期又

ハ一方ノ欲スルヨリ一層永キ時間ニ延期ヲ

言渡ス<sub>1</sub>ヲ得可キ乎

千六百七十三年ノ命令第四編第九條ニ於テ

可決セリ ○故ニ商法ニ於ケルモ亦同シク裁

判セリ 千八百二十五年八月三日「リオン」

我輩以為ラク若シ仲裁人カ雙方本人又ハ裁

判所ニ依テ撰任セラレシヤラ宜シク區別セ

サルヲ得ス

第一ノ場合ニ於テ我輩ノ見ヲ以テスレハ期



限ヲ延長スルニハ雙方本人皆承諾有ルヲ甚  
タ必要ナリトス、千八百十八年六月二十八日  
月十二日「ツール」<sup>ボルドー</sup>、千八百三  
十二年七月十七日「ゴルマル」

第二ノ場合ニ於テハ仲裁人ヲ撰ヒ以テ其職  
ヲ行フ可キ期限ヲ定ムルノ權利ヲ有スル裁  
判所ハ隨テ其期限ヲ延長スルノ能權ヲ有  
ス可キモノナリ、千八百二十六年五月十一日  
二月十八日、千八百三十年  
六月十四日覆審院判決  
其他若シ雙方本人仲裁人ノ其職ヲ行フ可キ  
期限ヲ定ムルニ付キ協議セサル片ハ裁判

所ヨリ之ヲ規定ス可シ(商法第五十四條)而シ  
テ該裁判所ハ仲裁人ノ裁判ス可キ爭訟ヲ現  
出シ得ル所ノ困難ヲ裁判スルナク故ニ爭訟  
ノ吟味及ヒ判断ヲ為スタメ尺ク可ラサル時  
間ノ猶豫ヲ確定スルニ非スレテ只管仲裁人  
ノ其職ヲ行フ可キ期限ヲ確定スルニ召喚  
セララル、モノナリ然レハ則チ此裁判所ニ於  
テハ最初定メタル期限カ確定ナラントテ嫌  
疑ス可クシテ又苟モ雙方本人中一人ヨリ要  
求セラレタル延期ハ裁判所ノ利益ナルトテ



認知スル片ハ之ヲ許與ス可キ權利ヲ有セサルヤヲモ嫌疑ス可シ而シテ此能權タルヤ何レノ法文タリトモ禁制スルヨリモ却テ法律上證書類ヲ差出ス可キノ期限ヲ擴ムルヲ許可スル商法第五十八條ノ結果ヲ生スルモノニ似タリ且ツ又仲裁人ノ其職ヲ行フ可キノ期限ヲ延長スルノ主趣ハ他無シ時日ヲ空シク經過セス且ツ費用ヲ節儉ス可シ  
千八百二十年三月二十八日、千八百二十五年八月三日覆審院判決  
千八百三十三年五月十三日「エ」控訴院判決

ニ曰ク總テ雙方間ニ已ニ生シタル又ハ生ス可キ諸般ノ争訟ヲ二箇月ノ期限内ニ裁判ス可ク商事裁判所ヨリ撰任セラレタル義務仲裁人ハ此定期間確定ニ計算書ノ一箇條ニ付キ判決セル後ハ「セ子ガール」ニ於テ為シタル事務ニ管スル計算書ノ他ノ箇條ニ扶持シテ一「ピエ」スラ供給スル為メニ四箇月ノ時月ヲ與フルヲ得可シト

第七百六十二節 商事裁判所ハ仲裁人ノ其職ヲ行フ可キ期限ノ了ハル前ニ延期ヲ言渡サ



サル可ラス千八百二十七年三月

然ラサレハ該裁判所ハ従前ノ仲裁人ヲ更ニ

撰任スルヲ得ル而已トス千八百十八年六月二十

十日控訴院判決書ノ意千八百二十

第七百六十三節 其他仲裁人ノ其職ヲ行フカ

為ノニ定メタル期限ノ既ニ終了シテ後裁判

所ヨリ仲裁人ノ權利ヲ延長セシニ因リ生シ

タル無効ハ雙方本人皆仲裁人ノ面前ニ出席

スルヲ依テ之ヲ覆フハル、モノトス千八百三

十三年七月二十三日覆審院判決

第四款 第三ノ仲裁人ルビユル、アル

第一條 第三ノ仲裁人ノ指命ハ如何

ナル場合ニ之ヲ要スル乎

第七百六十四節 總テ争訟ハ是非トモ仲裁人

ヲシテ之ヲ判決セシメサル可ラス而シテ之

レカ為メ仲裁人ノ說ニ個以上ニ分派シタル

場合ハ第三ノ仲裁人ヲ指命ス可キヲ要ス可

シ商法第六十條 ○然シナカラ好意仲裁人ノ事ヲ述

フル所ノ前第三百三十八節ヲ參觀ス可シ

第七百六十五節 好意仲裁人ノ說ニ個以上ノ



分派及ヒ之ヲ證明ス可キ方法ニ管スル訴訟  
法第千十七條ノ規則ハ義務仲裁人ニモ亦之  
ヲ適用ス可シ

然シナカラ千八百九年四月八日巴里控訴院  
ノ判決ニ曰ク従前ノ仲裁人第三ノ仲裁人ヲ  
擇ムトニ付キ異議有ル旨ヲ調書ニ記セサル  
ニ依テ以テ第三ノ仲裁人ノ指命ヲ無効ニ致  
ス可ラスト

第七百六十六節 義務仲裁人ハ好意仲裁人ノ  
如ク其說ノ二個以上ニ分派セシ旨ヲ公告ス

ルノ前兩說ニ減縮セサル可ラス○其他前ノ  
第三百三十九節參觀

第七百六十七節 此場合ハ說互ニ相異ナル仲  
裁人ハ其職掌ニ因リ第三ノ仲裁人ヲ指命ス  
可シ若シ其仲裁人ヲ撰ムトニ付キ協議セサ  
ル中ハ商事裁判所ヨリ之ヲ指命セラル可シ  
商法第  
六十條

第七百六十八節 仲裁言渡書ハ其執行ノ示令  
ヲ得シカ為ノ掛リ裁判所ノ書記局ニ之ヲ納  
ム可シ○後ノ第八百二十九節及ヒ其他前ノ



第三百七十節參觀

第七百六十九節 各所ニ任スル仲裁人ニ名ヲ引續キ指命シタル場合ハ更ニ指命セラレタル仲裁人ノ面前ニ雙方本人ノ出席シタルト及ヒ此仲裁人々其説ノ互ニ相異ナル場合ニ於テ第三ノ仲裁人ノ撰任ヲ仲裁人任所ヲ管轄スル裁判所ニ屬セサル可ラサルカ為メニ法律上全ク職務ニ従事シタルト等ヲ以テ足レリトス○従前ノ仲裁人ニ係ル言渡書即チ判決書有ルト雖モ敢テ要トセス  
千八百二十六年二月十日

四日覆審院判決

第七百七十節 雙方本人ハ特別ナル條件ヲ設

ケテ自ラ第三ノ仲裁人ヲ撰任スルノ方法ヲ規定スルトヲ得可シ

第七百七十一節 第三ノ仲裁人ノ撰擧ハ時機

ニ因リ民事裁判所ノ上席人ニ之ヲ委子ルル有ル可シ  
千八百二十九年八月六日 巴里 ○前ノ第三百六十

九節參觀

第七百七十二節 凡ソ仲裁人ト成ルヲ得可キ

者ハ固ヨリ第三ノ仲裁人ト成ルトヲ得可シ



○其他前ノ第三百七十二節參觀

第二條 第三ノ仲裁人ノ權利ノ繼續

○其仲裁ヲ為スノ方法

第七百七十三節 好意仲裁人ノ為メニ規定シ

タル規則ハ義務仲裁人ニモ亦之ヲ適用ス可

シ但シ商法ノ明文ニ反背スル場合ハ格別ナ

リトス○前ノ第三百七十三節及ヒ以下參觀

第七百七十四節 此ニ由テ是ヲ觀レハ左ノ如

シ

第一 第三ノ仲裁人ハ其仲裁言渡ヲナス

為メ法律上許與セラレタル一箇月ノ期

限ハ好意仲裁人ニ於ケル如ク義務仲裁

人ニモ亦之ヲ適用ス可キモノナリ

一年十一月三十日、巴里、千八百十九年五

月十一日、メツツ、千八百二十四年五月三

十一月三日、モンパ、リ、千八百二十三年

二月三日、ボルト、千八百二十五年一月

十九日、巴里

第七百七十五節 第二 仲裁人第三ノ仲裁人  
ヲ任シ宜シク其言渡ヲ為ス可キ期限ヲ定メ

タル片及ヒ此期限カ自ラ言渡ヲ為ス可キ期  
限ヲ踰越スル片ノ如キ第三ノ仲裁人ノ指命



ハ本人ノ權利ノ消散スルニ至ル迄其職ヲ行  
フ可キノ期限ヲ惹起ス可シ  
千八百二十四年  
三月十七日覆審  
院判  
決

第七百七十六節 第三 第三ノ仲裁人ハ「チエ  
ル、アルビートル」即チ第三  
ト同様ノ方法ヲ以テ  
仲裁ヲ為ス可シ○前ノ第三百七十七節及ヒ  
以下參觀

第五款 義務仲裁人ニ係ル事務ノ手續

○取調○仲裁ノ言渡

第一條 事務手續○取調

第七百七十七節 義務仲裁人ニ係ル事務手續  
ノ法式ハ好意仲裁人ノ為メニ指示シタル法  
式ト相符合セリ○前ノ第四百十二節及ヒ以  
下參觀

第七百七十八節 故ニ義務仲裁人ハ其辞令書  
又ハ裁判所ノ何レノ法式ヲ履行スル「ナク  
雙方本人ヨリ差出シタル證書類及ヒ覺書ニ  
依テ豫メ召喚狀ヲ必要トスルニ非スシテ爭  
訟ヲ裁判ス可シ  
高法第五  
十六條

第七百七十九節 然シナカラ義務仲裁人ニ在



テハ其事務ノ取扱ハ好意仲裁人ヨリ一層迅速ナル可シ

第七百八十節

證書類及ヒ覺書ヲ仲裁人ニ差

出ス<sub>1</sub>ヲ急リタル社員ハ十日内ニ此差出方

ヲ為ス可ク促迫セラル可シ

商法第五十七條

第七百八十一節

催促書ハ仲裁人ニ向ケタル

願書ノ送達ニ依テ適法ニ補足セラル可シ而

シテ事務手續ノ景狀カ社負ヲシテ其差出方

ヲ怠慢ナラレハルハ既ニ差出シタル單一

ナル證書類ニ依テ裁判ニ着手サル、<sub>1</sub>ニ赴

ク可シ

千八百四十年一月二十一日覆審院判決

第七百八十二節

十日ノ期限ヲ經過シタル片

ハ縱令仲裁人ニ附與セラレタル期限ノ終ル

時ヨリ十五日以上ノ餘日有ルト雖モ(訴訟法

第七百八十二節)仲裁人ハ既ニ差出サレタル簡單

ナル證書類及ヒ覺書ニ依テ裁判スル<sub>1</sub>ヲ得

可シ

商法第五十九條

第七百八十三節

然シナカラ仲裁人ハ苟モ至

急ヲ要スル場合ニ從ヒ證書類ヲ差出ス可キ

ノ期限ヲ延長スル<sub>1</sub>ヲ得可シ

商法第五十八條



此場合トハ仲裁人既ニ差出サレタル證書類  
及ヒ覺書ニ依テ裁判スルヲ得可キ所ノ新  
規ノ期限ノ消散スルキトス 商法第五  
十九條

第七百八十四節 商事裁判所ハ仲裁人ノ面前  
ニ訴訟ヲ移シ以テ確定ノ期限内ニ雙方本人  
ヲシテ遲緩ニ付キ毎日ノ損害賠償ノ罪ヲ以  
テ書翰類、書面及ヒ訴訟ノ證據書ヲ差出サシ  
ムルヲ命スルヲ得ス若シ之ヲ命スルキハ  
該裁判所ハ其管轄權ノ區域ヲ超越スル而已  
ナラス仲裁人ノ職權ヲ押領スルニ至ラン

百三十三  
年一月  
十一日

第七百八十五節 最初ノ仲裁言渡書ヲ以テ證  
書類ヲ差出ス可キ十日ノ期限ヲ附與シタル  
後新規ノ仲裁人カ撰命セラル、キハ其仲裁  
人ノ行フ可キ職務ハ性質ヲ變セサルモノニ  
シテ雙方本人モ亦従前ノ事務手續ヲ継カサ  
ル可ラス此ニ由テ是レヲ觀レハ新規ノ仲裁  
人ハ更ニ十日ノ期限ヲ拒ミ唯證書類ヲ差出  
ス可キ為メニ二十四時ヲ附與スルヲ以テ法  
律ニ乖戾セサルナリ 千八百三十二年八月  
二十一日覆審院判決



第七百八十六節 附帶ノ訴訟及ヒ訴訟ノ本案ニ管セサル預審ノ仲裁言渡及ヒ其本案ニ管ス可キ預審ノ仲裁言渡ニ管係スル好意仲裁人ニ許可シタル決断ハ義務仲裁人ニモ亦之ヲ適用ス可シ○前ノ第二百二十七節、第四百十二節及ヒ以下參觀

第七百八十七節 故ニ義務仲裁人ノ其吟味手續ニ付テノ書類又ハ其調書ハ全負相共ニ之ヲ記セサル可ラス訴訟法第一千〇一條ノ意○特ニ該仲裁人ハ訴訟ノ生シタル地ニ至リテ検査ヲ為ス

又ハ雙方本人ノ爭フ所ノ事柄ノ證件ヲ得ルト是等ノ事ヲ其仲裁人中ノ一人ニ任スルヲ得ス○千八百二十四年八月二十一日巴里其他本人仲裁人ノ事務取扱ヒニ異論ナク參加シ然ル后此者ノ面前ニ於テ其事務取扱ヒニ付キ本案ノ結局ヲ討論駁議シ以テ訴訟法第一千十一條ニ背戾セルノ理由ヲ述ヘ仲裁言渡ヲ取消サント訴フルモ受理セラレサルナリ千八百二十八年五月十二日覆審院判決

第七百八十八節 義務仲裁人證人吟味ノ場合



ハ商事裁判所ニ代テ訴訟法ノ諸規格ニ遵守  
ス可シ然レテカラ該仲裁人ハ雙方本人若シ  
證人吟味ヲ為ス<sub>一</sub>ヲ拋棄<sub>シ</sub>タル旨ヲ明言スル  
<sub>ハ</sub>自ラ避クル<sub>一</sub>ヲ得可シ

何レノ時機ヲ問ハス證人吟味ハ縱令仲裁人  
ノ預審ノ言渡書ヲ以テ命セサル<sub>ハ</sub>及<sub>ヒ</sub>證人  
又ハ本人ニ一モ召喚狀ヲ送達セサル<sub>ハ</sub>ト雖  
モ違法ノモノトス其他證人ヲ問糺ス<sub>一</sub>ハ誓  
詞ヲ宣述スルト共ニ雙方本人ノ面前ニ於テ  
之ヲ為ス可シ  
千八百二十九年一月  
二十三日

第七百八十九節

仲裁言渡ヲ為ス可キ手續ニ  
及ハサル前ニ權利ノ解除シタル仲裁人ノ認  
メタル證書及<sub>ヒ</sub>其調書ハ雙方本人ヨリ受收  
サレ然ル后其本人中一人ノ要求ニ依テ商事  
裁判所ノ書記局ニ之ヲ納メラル可シ  
千八百  
三十九  
年三月二  
十日

第二條 仲裁ノ言渡

第七百九十節 仲裁言渡ヲ為ス可キノ定式ハ  
好意仲裁人ニ許サル、所ノ定式ニ異ナラス

○前ノ第四百六十二節參觀



然シナカラ商法第六十一條ニハ仲裁人ノ其  
仲裁言渡書ハ趣意ヲ記ス可キトヲ明。白。ニ要  
セリ

第七百九十一節 此仲裁言渡書ハ商事裁判所  
ノ書記局ニ之ヲ納ム可シ○後ノ第八百二十  
九節參觀

第六款 義務仲裁人ノ仲裁言渡書ノ効  
第七百九十二節 凡ソ訴訟法ハ明黙ヲ問ハス  
商法ニ乘戾セサルキハ之ヲ義務仲裁人ニ適  
用ス可シ

故ニ義務仲裁人ノ仲裁言渡書ハ雙方本人間  
ニ既決ノ權力 即チ既ニ控訴ス可ラサルニ至  
リシ裁判ヲ經タル事ノカラ云  
フヲ有ス可シ

第七百九十三節 若シ種々ノ箇條ヲ處分スル  
場合ニ於テ仲裁人中一人ノ死去スルニ因リ  
引續キ二名ノ仲裁人ノ指命セララル、片ハ最  
後ニ指命セラレタル仲裁人ハ最初ノ仲裁人  
ノ判決セル箇條ハ再ヒ之ヲ論議スルトヲ得  
ス蓋シ此最初ノ仲裁人ハ一通ノ言渡書ヲ以  
テ箇條ヲ裁判ス可ク餘義ナクサレサルモノ



ナリ前ノ第四百五十節參觀千八百十年五月三十日「グリユキ

ユスゼ○又最初ノ仲裁人ノ其定メタル箇條

ハ如何ナルヤヲ確定ス可キハ商事裁判所ニ

屬セシムルニ非スレテ之レニ代フル所ノ仲

裁人ノ權内ニ差置キタリ全上ハ

仲裁言渡書カ一社負ラシテ確定ノ金額ノ債

主ナリト明言シ以テ此金額辨濟ノ言渡ヲ附

記スルヲ遺忘シタリ蓋シ此遺忘ニ因リ更

ニ仲裁人ヲ任セシキハ該仲裁人ハ既決ノ權

カヲ破敗スルニ非スンハ計算ヲ改良スルヲ

ヲ得サルモノナリ千八百二十九年七月二十七日「ボルド」

第七百九十四節 會社ノ證書ヲ取消サント求

ムル訴ヲ為スト雖モ嚮キニ仲裁人ノ此證書

ノ箇條ニ循ヒ為シタル仲裁言渡書ハ之レカ

取消ヲ致ス可ラス千八百四十年六月十七日覆審院判決

第七百九十五節 仲裁人ニ付キ其仲裁言渡書

ノ日。附。及ヒ該言渡書ノ効ニ管シテハ前ノ第

五百節ヲ參觀ス可シ

第七百九十六節 仲裁言渡書ハ第三ノ人ニ付

テハ無効タル可シ○前ノ第五百十八節及ヒ



後、第七百九十九節參觀

第七款 義務仲裁人ノ仲裁言渡書ニ對

シ控訴スルノ方法

第七百九十七節 義務仲裁人ハ法律上真箇ノ  
裁判官ノ如ク見做サル、モノニシテ社負間  
ノ争訟ニ付テハ特別商事裁判所ノ類ヲ構成  
スルモノナリ是ヲ以テ該仲裁人ノ仲裁言渡  
書ハ尋常裁判言渡書ヲ改正センカ為メニ開  
始シアル所ノ方法ニ依リ攻撃セラル可シ  
第七百九十八節 然レナカラ故障申述ハ好意

仲裁人ニ於ケルヨリ一層義務仲裁人ニ於テ

ハ受理セラレサルナリ前ノ第五百二十六節

參觀而シテ好意仲裁人ノ依遵ス可キ諸規則

ハ明黙ヲ問ハス商法ニ乖戾セサルハ之ヲ

義務仲裁人ニ適用ス可シ而シテ好意仲裁人

ト義務仲裁人トニ論ナク其職ヲ行フ可キ定

期既ニ終リタル中ハ各自皆々雙方本人ヨリ

差出サレタル簡單ナル證書類及ヒ覺書ニ依

リテ裁判ス可シ商法第五十七條ヨリ第五十

九條ニ至ルノ意又此定期ノ了ハル前ニ為シ



タル仲裁言渡書ハ故障申述ノ方法ヲ以テ控  
訴セラル、ナク之ヲ取消サントノ訴ヲ受ク  
可シ

第七百九十九節 第三ノ人ヨリ為セル故障申  
述ハ亦受理セラレサルナリ此ニ由テ憶フニ  
此レハ好意仲裁人ニ對スルト同様ノ趣意ナ  
リトス○前ノ第五百二十八節參觀

第八百節 執行ノ示令ニ係ル故障申述ハ又義  
務仲裁人ノ其仲裁言渡書ニ對シ受理セラ  
ル可キ乎

論者或ハ可決シテ曰ク若シ明文ニ乖戾セサ  
ル中ハ好意仲裁人ニ管スル諸規則ハ又義務  
仲裁人ニ之ヲ當テ用フ可シ又仲裁言渡書ヲ  
取消サント求ムル訴ハ商法ノ之ヲ廢却セサ  
ル所ニシテ此訴訟ヲ許可ス可キ理由ハ仲裁  
人ノ二種ニ於テモ亦等シク成立ツ可シ而シ  
テ人或ハ預定ノ法典ヲ討論駁議セシキニ湖  
ル中ハ加撮ナル事ハ立法者ノ意思タルノ  
確證ヲ得可シト

「ロクレ」氏商法精理ノ第一  
第二百二十二、第二百二十六

千八百九十八年八月十一日、千八百十



一年十一月五日覆審院判決、千八百三十三年  
五月十三日、千八百二十九年三月六日「エー」、千  
八百三十三年八月十六日、千  
八百三十三年五月九日巴里

然レ氏右ト反對論ハ好意仲裁人ノ場合ニ於  
テ仲裁言渡書ヲ執行ス可キノ示令ニ係ル故  
障申述ヲ許スノ必要ナル中ハ實ニ道理ヲ  
以テ實施セルモノナリト何トナレハ總テ仲  
裁人ハ雙方亦人ヨリ自己ノ權利ヲ獲ルモノ  
ナレハ直接ニ全ク裁判官タルノ性質ヲ喪失  
スルニアラスンハ其權利ヲ踰越スルヲ得  
ス蓋シ真箇ノ裁判官タル可ク且ツ商事裁判

所ノ如ク判決ス可キ義務仲裁人ニ付テハ之  
レト同シカラス是故ニ取消ス可キノ方法ハ  
商事裁判所ノ裁判言渡ニ對シテハ開始セラ  
レサルカ故ニ義務仲裁人ノ仲裁言渡ニ對ス  
ルモ亦之ヲ開始セサルモノトス○其他執行  
ノ示令ニ係ル故障申述ヲ許可ス可キ一ノ有  
益ナルヲモ莫カル可シ何トナレハ雙方本人  
ハ控訴又ハ破毀ノ方法ニ依テ同様ノ成果ニ  
容易ク到着スレハナリ  
千八百三十年四月七日  
及ヒ七月二十五日  
千八百三十一年三月八日  
千八百三十一年三月十日  
覆審院判決、千八百二十







ル故障申述ノ方法ヲシテ爾餘ノ法律上ノ方法ニ依リ補足セシムルヲ證ス可シ實ニ第一、商業會社ノ事ニ付テハ凡ソ仲裁委託契約書ハ法律ニ循ヒ認メラル、カ故ニ仲裁言渡書ハ決シテ委託契約書ナク又無効ナル委託契約書ヲ以テ為サル、トヲ得ス故ニ第一千二十八條ニ定メタル無効ノ最初ニ箇ノ方法ハ之ヲ當用スルトヲ得サル可シ○第二、總テ仲裁人ハ會社ニ管スル諸般ノ爭事ヲ判定ス可キノ任ヲ帶フルカ故ニ會社ニ管セサル或ル

事件ニ付キ仲裁言渡ヲ為ス可キ時ノ外仲裁委託契約書ニ定メタルヨリ以外ノ事件ニ付キ言渡ヲ為ストヲ得ス然レモ斯ノ如キ場合ニ於テハ該仲裁人ノ管轄異ナルヤ明瞭タリ故ニ人或ハ總テノ拋棄ニ拘ハラズ其仲裁言渡ヲ控訴スルトヲ得可シ(訴訟法第四百五十四條ノ意)而シテ雙方本人ハ實ニ能ク裁判權ヲ變更スルニ非ラスレテ之ヲ延長スルトノ權ヲ有ス可シ○第三、又雙方本人ハ言渡書ニ依リ定メタル期限已ニ終リテ後更ニ仲裁人



ヲ任スルヲ挑ミ以テ従前ノ仲裁人ヲシテ  
裁判ヲ為サシメサルノ方畧ヲ有ス可シ若シ  
此能權ヲ使用セサルハ該仲裁人ノ懈怠ノ  
結局ヲ自ラ受ケサル可ラス○第四二三ノ仲  
裁人爾餘仲裁人不在ナルハ仲裁言渡ヲ為シ  
タル場合又ハ第三ノ仲裁人説互ニ相異ナル  
仲裁人ト評議スルナク仲裁言渡ヲ為シタル  
場合ニ付テハ總テ仲裁人タル者ハ相共ニ評  
議ス可キヲ要スル規則ニ背戾シタレハ漫ニ  
裁判ヲセサルノ罪アリトシテ訴訟ヲ受ク可

ク及ヒ仲裁言渡ヲ取消シ其償ヲ得ントスル  
ノ訴訟ヲ受ク可キモノトス(訴訟法第五百五  
條)○第五雙方本人ヨリ仲裁人ノ仲裁ヲ要メ  
サル事件ニ付キ仲裁言渡アリシ時又ハ雙方  
本人ヨリ仲裁人ニ命シタル法式ヲ履行セサ  
リシ時ハ敬慎ノ願書ハ顯然許可セラル可シ  
(訴訟法第四百八十條ノ第二及ヒ第三)千八百  
年十二月四日巴里千八百二十八年五月  
七日千八百三十二年三月覆審院判決  
執行ノ示令ニ係ル故障申述カ仲裁人ノ管轄  
異ナルト又ハ其權利ノ過度ナルトニ基因セ



ラルハ、敢テ要トセス  
千八百三十八年六月  
百三十九年三月十九日「ク」  
百四十年二月十六日「ク」  
覆審院判決

第八百三節 故ニ執行ノ示令ニ係ル故障申述

ハ左件ニ付テハ受理セラレス

第一 縦令控訴ス可キヲ抛棄シタリシハ

及ヒ第三ノ仲裁人ノ方ニ付キ權利ヲ過

度ニ為シタルヲ辨明シタリシ時ト雖

モ受理セラレサル事 千八百三十五年二

第二 縦令仲裁人雙方本人ヨリ要メサル

事件ニ付キ仲裁ヲ言渡シタルニ依リ權

利ヲ過度ナラシメタルト雖モ受理セ

ラレサル事 千八百三十九年

若夫レ或ル會社ノ争訟ヲ二箇月間ニ確定ノ

裁判ヲ為ス可ク任命セラレタル仲裁人ハ社

員中一人ノ正シキ計算書ニ付キ判決ヲ為シ

テ後更ニ計算書ヲ差出ス為メニ四箇月間ヲ

附與シタルハ此期限タルヤ第千二十八條

ニ揭示セル場合ニ入ル可ラスシテ又一モ權

利ノ過度ナルヲ成サ、ルナリ 千八百三十

三日  
エ



第四百四節

若夫レ雙方本人仲裁人ニ雙方本

人間ニ勸解慰諭ヲ為ス可キノ權有ル仲裁人

ノ如ク已レテ裁判ス可キノ權利ヲ附託シタ

ル片ハ如何。

此場合ニ於テハ義務仲裁人ハ好意仲裁人ニ

位置ヲ讓ルカ為メニ消滅ス可キ理由ニ基キ

二三ノ論者ハ好意仲裁人ノ遵守ス可キ諸規

則ヲ遺施シ而シテ執行ノ示令ニ係ル故障申

述ヲ許可セリ千八百十七年七月十六日、千八

年六月二十三日、千八百二十四年六月、千八

日、覆審院判決、千八百三十八年十一月二十日

巴里、千八百四十三年

然シナカラ右ト反對論ハ實施セリ即チ右問

題ハ仲裁人ニ附託シタル權利ノ廣狹ニ非ラ

スシテ仲裁人ノ真箇ノ性質ヲ組立ツル所ノ

職務ヲ行フニ管係ス可ク而シテ商業會社

ニ管スル以來仲裁人ハ雙方本人ノ契約ニ依

リテ義務仲裁人ノ為メニ法律上規定シタル

規則ニ許サレタル變更ノ如何ヲ問ハス義務

タル可シト千八百二十八年五月七日、覆審院

判決、千八百四十年十一月二十日、巴里、千八

判、千八百四十年十一月二十日、巴里、千八



百三十八年五月十五  
日覆審院合局ノ判決  
○其他前ノ第六百九十  
五節及ヒ第三千二百三十三條參觀

第八百五節 是故ニ故障申述ノ方法ハ控訴ヲ  
拋棄セシト破毀ヲ求ムル訴ヲ拋棄セシ而已  
ナラス尚ホ又其他總テノ控訴ヲ拋棄シタル  
雙方本人ニ於ケルモ矢張之ヲ為スヲ得ス  
即チ然ル片ハ其雙方本人ハ尋常裁判所ニテ  
管渉ス可キ言渡書ニ從フ可キヲ契約セシ  
ト同様ノ位置ヲ有ス可ク而シテ若シ仲裁人  
カ雙方本人間ニ勸解開慰スルノ權ヲ有スル

仲裁人ヨリ一層伸張シタル權利ヲ受クル片  
ハ仲裁人ハ其義務仲裁人ノ性質ヲ喪失ス可  
ラスノ意、千八百四十三年五月十一日巴里判決書  
決、千八百三十二年三月七日覆審院判決書ノ  
意、千八百二十八年七月十四日「リオン」千八百  
三十八年十月十二日及  
十一月二十日巴里

第一條 控訴

第八百六節 義務仲裁人ノ仲裁言渡書ハ商事  
裁判所ノ裁判言渡ニ對シ開始セラル、控訴  
ノ場合詳カニ之ヲ言ハ雙方本人ノ相争フ  
所ノ物件カ千五百「フラン」以上ナル中（千八百



四十年三月三日ノ法律第二條又ハ其仲裁人  
商事裁判所ノ管轄ス可キ事件ヲ裁判セシキ  
ハ控訴ノ手段ニ因テ攻撃セラル可シ  
年三月二十〇日控訴ノ部及ヒ然シナカラ前ノ  
第五百三十五節參觀

又訴訟法第四百五十三條ニ及レテ仲裁人ノ  
仲裁言渡書ハ終審ノモノナリト記シタル時  
ハ之ヲ控訴スルヲ得スト裁判セリ  
スシドール月二十  
一日覆審院判決

第八百七節 雙方本人ハ控訴ス可キ權ヲ拋棄

スルヲ得可シ

特ニ仲裁言渡書ニ記載シタル申述ニ依テ之

ヲ拋棄スルヲ得可シ  
千八百二十年十月十  
八日ブリユキユスゼ

第八百八節 雙方本人ノ承諾ハ其中一方ニヨ

リ之ヲ廢棄ス可ラス  
千八百六十年十月八日覆  
審院判決、共和十三年ウ

ワシンドール月二十  
十日コルマル

第八百九節 雙方本人控訴ス可キノ權ヲ拋棄

スル片ハ自ラ此控訴ノ手段ヲ閉塞ス可シ  
千

八百三十四年八月十二日覆審院判決、千  
八百三十五年二月十四日ブリモルジユ



第八百十節 左ノ如キ場合ハ例外トス

第一 管轄異ナル場合又ハ權利ノ過度ナ

ル場合 訴訟法第四百五十四條ノ意、千八百三十九年一月七日「ラ」又、同年

三月十九日「ラ」

總テ控訴ヲ拋棄シタル場合ニ於テハ第三ノ

仲裁人説互ニ相異ナル仲裁人二名ト與ニ評

議セサルニ因リ又ハ仲裁人二名中此彼ノ説

ヲ採用セサルニ因リ第三ノ仲裁人ノ仲裁言

渡ニ生スル不規則ハ即チ管轄外ナルノ方法

ヲ組成セサルモノトス 千八百四十年六月十七日覆審院判決

○又第三ノ仲裁人ハ説互ニ相異ナル旨ヲ申

立ツル前ニ仲裁言渡ヲ為シタル片ト雖モ亦

管轄外ナルニアラス 千八百三十五年二月十日覆審院判決

第八百十一節 第二 會社ノ効ナキ證書ニ付

キ之ヲ控訴ス可キノ拋棄ヲ為シタル片此場

合ニ於テハ仲裁人ハ最早證書ノ權ヲ得ル

ヲ得ス蓋シ此證書トハ會社ノ共分會社ニ變

様シタル片其共分ノ時機ニ臨ミ生シタル争

訟ヲ尋常義務仲裁人ニ屬セシムル所ノモノ

ナリ 千八百四十一年六月二十九日、千八百四十年六月十七日覆審院判決



第八百十二節 第三 仲裁人 社員中一人ノ死  
去シタル後其相續人ト共ニ控訴ヲ拋棄ス可  
キ旨ヲ記セサル新規ノ仲裁委託契約書ニ依  
リ指命セラレタル場合 千八百三十六年三月  
十六日覆審院判決  
第八百十三節 然レモ斯ノ如キ拋棄ハ推測セ  
ラレス且ツ此彼ノ場合ニ擴張セラル、ヲ得  
ス是故ニ左ノ如シ

第一 仲裁裁判所ノ構成ニ管スル争訟ノ  
醸生セシキハ此附帶ノ訴訟ニ管渉スル  
所ノ言渡ハ縱令雙方本人カ仲裁委託契

約書中ニ控訴ス可キノ權ヲ拋棄セリト  
雖モ控訴ヲ受ク可シ 千八百十八年七月  
十五日覆審院判決

第二 控訴ス可キノ權ノ拋棄ハ商事裁判  
所ヨリ任命セラレタル第三ノ仲裁人ノ  
言渡ニ之ヲ為ス可ラスレテ仲裁人ノ其  
言渡ニハ適施ス可シ○前ノ第四百十一  
節參觀

其控訴ス可キ權ノ拋棄ハ破毀ノ控訴ヲ惹起  
サ、ル、言ヲ俟タス

第八百十四節 然シナカラ其控訴ス可キ權ノ



第八百十二節 第三 仲裁人社員中一人ノ死  
去レタル後其相續人ト共ニ控訴ヲ拋棄ス可  
キ旨ヲ記セサル新規ノ仲裁委託契約書ニ依  
リ指令セラレタル場合千八百三十六年三月  
十六日覆審院判決  
第八百十三節 然レモ斯ノ如キ拋棄ハ推測セ  
ラレズ且ツ此彼ノ場合ニ擴張セラル、ヲ得  
ス是故ニ左ノ如シ

第一 仲裁裁判所ノ構成ニ管スル爭訟ノ  
醸生セシ中ハ此附帶ノ訴訟ニ管涉スル  
所ノ言渡ハ縱令雙方本人カ仲裁委託契

約書中ニ控訴ス可キノ權ヲ拋棄セリト  
雖モ控訴ヲ受ク可シ千八百十八年七月  
十五日覆審院判決  
第二 控訴ス可キノ權ノ拋棄ハ商事裁判  
所ヨリ任命セラレタル第三ノ仲裁人ノ  
言渡ニ之ヲ為ス可ラスレテ仲裁人ノ其  
言渡ニハ適施ス可シ○前ノ第四百十一  
節參觀

其控訴ス可キ權ノ拋棄ハ破毀ノ控訴ヲ惹起  
サ、ル、言ヲ俟タス

第八百十四節 然シナカラ其控訴ス可キ權ノ



拋棄ハ會社ノ證書中ニ契約シ有ルキハ決算  
人ト社負問ニ起リタル争訟當此而已ナラス  
決算ニ関スル所ノ會社ノ進行ニヨリ起リタ  
ル争訟ニモ亦適施ス可シ  
決 月十三日覆審院判

第八百十五節 又其拋棄ハ會社解散ノ前後ヲ  
問ハス社ノ證書類ノ監定ニ因リ起リタル争  
論ニ至ル迄之ヲ擴伸スルヲ得可キモノナ  
リ  
千八百四十三年三月  
十六日覆審院判決  
第八百十六節 凡ソ控訴ハ其受理セララルハ片

ハ仲裁言渡ノ為サレタル地方ヲ管轄スル之  
ヲ詳言スレハ執行ノ示令ヲ發シタル王法院  
即チ控訴ニ之ヲ為サ、ル可ラス但シ雙方本  
院ヲ云フ  
人此事ニ付キ別段契約シタルヲ有ルキハ格  
別ナリトス○後ノ第八百二十九節參觀  
又控訴ハ仲裁人ヲ撰任シタル裁判所若クハ  
雙方本人自ラ仲裁人ヲ撰任セサル片之ヲ指  
命シタル裁判所所在ノ地方ヲ管轄スル王法  
院ニ之ヲ為ス可ラス○千八百二十七年五月  
二十一日「クワン」控訴院判決書○論者或ハ此



最終ノ判決ノ方法ニ付キ或ハ義務仲裁人ハ  
唯已レヲ撰任シタル裁判所ノ補助官ナルヲ  
或ハ其仲裁人ハ恰モ其裁判所ノ溢流モノヲ  
構成シ之レト類似セルヲ或ハ附帶ノ訴訟ハ  
仮令仲裁人ニ廻送セリト雖モ實ニ最初之ヲ  
為シタル裁判所ニ存立ス可ク而シテ該裁判  
所ハ獨リ仲裁人ノ其職ヲ行フ可キ期限間ニ  
起生スル所ノ附帶ノ訴訟ヲ裁判ス可キノ所  
任タルヲ等ヲ論辨スト雖モ此論取ルニ足ラ  
ス○前ノ第二百二十八節參觀

第八百十七節

若夫レ仲裁人カ會社ノ算定ニ  
付キ裁判ス可キニ止ル代リニ會社ヲモ無効  
ト為シタルニ因リ王法院ニテ仲裁言渡書ヲ  
更改セシ片ハ王法院ハ敢テ爭訟ヲ爾餘ノ仲  
裁人ニ廻送スルニ及ハスレテ裁判權ノ二個  
ノ等級ノ規格ヲ破ルヲナク之ヲ裁判スルヲ  
ヲ得可ク而シテ又商法第五十一條云フ所ニ  
違背スルヲナク決算ニ付キ言渡ヲ為スヲ  
得可シ

千八百二十四年十一月  
二十三日覆審院判決

第二條

敬慎ノ願書



第八百十八節

夫レ敬慎ノ願書ハ之ヲシテ義

務。仲裁人ノ仲裁言渡書ニ對シ許サシムルモ

ノナルヤヲ論述スルノ點ニ付キ著述者間ニ

在テハ論說頗ル紛々タリ

一方ノ說ニ據レハ曰ク此取消ヲ願フ許ハ商

業會社ノ計算書及ヒ其決算ニ管レタル爭訟

ニハ之ヲ適用ス可ラスト抑々立法家ノ此類

ノ事務ヲ仲裁人ニ委托スルノ主趣ハ他無シ

雙方本人ノ為メニ尋常訴訟ニ付キ空レク時

日ノ經過スルヲ防キ或ハ其費用ヲ節儉スル

カ爲メナリ然ルニ敬慎ノ願書ヲ許可スル片

ハ此等二個ノ不都合ヲ是非トモ惹起ス可シ

○其他敬慎ノ願書ハ既ニ攻撃セラレタル裁

判言渡ヲ為セシ裁判官ニ之ヲ出サハル可ラ

ス而シテ總テ仲裁人ハ其仲裁言渡ヲ為ス以

來全權ヲ喪失ス可キカ故ニ敬慎ノ願書ヲ判

決ス可キ為メノ性ヲ帶ヒサルヲ瞭然タリ然

リ而シテ商法第五十二條ハ限制法ニシテ人

或ハ仲裁言渡書ニ對シ該商法ノ體ニ明示ス

ル所ノ手段ヨリ爾餘ノ更改ノ手段ヲ以テス



ルヲ許サレサルナリ  
千八百十年七月二十  
五日ヲシテ、千八百二

十四年八月  
六日巴里

千七百九十三年六月十日及七十月二日ノ法

律ニ循ヒ仲裁人相與ニ為シタル仲裁言渡書

ハ共和七年「ブリュメール」月二十八日ノ法律

及ヒ共和九年「フリメール」月十一日ノ法律ニ

控訴ヲ受ク可キ旨ヲ定メタルカ故ニ敬慎ノ

願書ニ依リ攻撃セラレサルモノトス  
千八百十五年

七月十八  
日巴里

然レモ論者或ハ古ニ答テ曰ク凡ソ立法家タ

ル者ハ商人間ノ争訟ヨリ一層社員間ノ争訟

ニ付テハ費用ヲ節儉スルノ熱心ヲ顯サ、

ルナリ而シテ其他仲裁人ノ取調ハ尋常商事

裁判所ニ於ケル取調ヨリ少ナカラス費用ヲ

要ス可シ然リト雖モ此裁判所ノ裁判言渡ハ

敬慎ノ願書(此語ヲ看ヨ)ノ手段ニ依リ攻撃サ

レ得ルノ疑ヲ容レスト

仲裁人ノ職務ハ其仲裁言渡書ヲ授與スルニ

因リ随テ解ク可キヲ敢テ切要ナラス何ト

ナレハ法律ハ仲裁言渡書ニ執行ノ示令ヲ發



セシ裁判所ニ敬慎ノ願書ヲ差出ス。イラ明記  
スト雖モ其言渡書ハ同一ノ人ヲレテ之ヲ裁  
判セシムル。イラ明言セサレハナリ是レ他ナ  
シ斯クノ如ク同一ノ人ヲシテ裁判セシムル  
。イハ最モ數々出來ク可ラス殊ニ一時裁判官  
ノ位置ヲ有スル所ノ商事裁判所ノ役負ニ付  
テハ出來ク可ラサルナリ然レハ則チ人或ハ  
同シ仲裁人ト若シ此者ノ事故有ルニ於テハ  
雙方本人又ハ裁判所ヨリ撰任セラレタル仲  
裁人トヲ問ハス仲裁人ヲ以テ編成セル裁判

（前石）

所ニ雙方本人ノ爭訟ヲ廻送シ以テ充分ニ自  
己ノ意欲ヲ充タス可シ。○其他第千二十六條  
ニハ豫メ如斯キ困難ヲ決定セリ曰ク普通規  
則ハ取除キ仲裁言渡書ニ對スル敬慎ノ願書  
ハ控訴ヲ裁判ス可キ當管ノ裁判所ニ之ヲ差  
出ス可シト  
又高法第五十二條云フ所ノ仲裁言渡書ニ對  
シ取ル可キ手段ニ付テハ限制ノモノニシテ  
更改ノ尋常手段ヲ占領スル而已ナリ而シテ  
尋常手段ノ生スルハ總テノ非常手段ヲ廢除



スルノ結果タルトハ既ニ見タリ何トナレハ  
裁判言渡ヲ取消シ其償ヲ求ムルハ訴ハ裁判  
所ノ役員ニ對スル如ク義務仲裁人ニ對シテ  
許サル、トハ覆審院ノ判決書ニ依リ認知ス  
レハナリ是ヲ以テ義務仲裁人ニ尋常規則ヲ  
適施スルハ甚タ至當ト云フ可クシテ且ツ義  
務仲裁人タル者ハ真箇ノ裁判所ヲ編成スル  
カ故ニ其仲裁言渡書ハ法律ニ規定セル場合  
ニ於テハ尋常裁判言渡書ニ對シ許サル、諸  
手段ニ依リ攻撃セラル可ク定ムルハ甚タ至

角石

當ト云フ可キナリ 千八百二十五年八月三十  
日「五月二十六日」  
年五月二十六日

第八百十九節 敬慎ノ願書ハ好意仲裁人ニ於  
ケルヨリ一層弘キ主趣ヲ以テ義務仲裁人ニ  
許サル、モノトス。前ノ第五百五十八節參  
觀

第八百二十節 故ニ法式ノ瑕瑾及ヒ本人ヨリ  
訴出セルヨリ更ニ餘分ノ事件ニ付キテノ裁  
判言渡書ハ敬慎ノ願書ノ手段ニ依テ攻撃セ  
ラル可シ即チ此關係ニ有ルニ因テ訴訟法第



千二十七條云フ所ハ第四百八十條ノ規則ニ  
依循ス可キ所ノ真箇ノ裁判官タル義務仲裁  
人ニハ遣施ス可ラス  
千八百二十五年八月三十一日リオン

第八百二十一節 雙方本人ハ敬慎ノ願書ニ依  
テ訴ヲ可キヲ拋棄スルヲ得可シ  
千八百十  
六年六月

十八日覆  
審院判決

第八百二十二節 此拋棄ハ或ハ明許タル可ク  
或ハ黙許タル可シ

第八百二十三節 然レナカラ此拋棄ハ詐偽欺  
罔ヨリ生スル手段ニ之ヲ當テ用フ可ラス○

角石

前ノ第百八十四節參觀

第八百二十四節 敬慎ノ願書ハ仲裁人ニ差出

スニ在ラスレテ仲裁言渡ノ控訴ヲ裁判ス可

キ當管ノ控訴院ニ之ヲ差出ス可シ  
訴訟法第  
千二十六

條ノ意、千八百二十五年  
八月三十一日リオン

第三條 破毀

第八百二十五節 破毀ヲ求ムルノ訴ハ義務仲  
裁人ノ終審ニ言渡シタル仲裁言渡書ニ對シ

之ヲ為スヲ得可シ  
商法第五十二條○之レ

ニ及スル前ノ第五百二十九節ヲ參觀ス可シ



第八百二十六節 管轄異ナルノ訴ハ民事裁判  
 所及ヒ仲裁人ニ代フル王法院ニテ會社ノ名  
 義ニ付キ社員間ニ發起シタル争訟ヲ裁決セ  
 シヨリ生スルモノニシテ最初覆審院ニ之ヲ  
 述フ可ラス 千八百四十二年六月  
 十一日覆審院判決  
 第四條 仲裁言渡ヲ取消シ其償ヲ得  
シトスル訴訟

第八百二十七節 仲裁言渡ヲ取消シ其償ヲ得  
 シトスル訴訟ハ仮令好意仲裁人ニ付テハ然  
 ラサルト雖モ義務仲裁人ニ對シテハ許サル

角石

ルモノナリ○前ノ第五百九十三節參觀○此  
 差異タルヤ義務仲裁人ハ縱令雙方本人ヨリ  
 指命セララルト雖モ矢張已レニ委託サルハ  
 訴訟ニ付キ商事裁判所ニ代ル一時真箇ノ裁  
 判所ヲ構成スルニ因リ又法律ハ該裁判所ニ  
 特別ノ管轄權ヲ屬セシムルニ因リ生スルモ  
 ノトス故ニ義務仲裁人ハ商事裁判所ノ役負  
 ト同視セラレサル可ラス 千八百十七年五月  
 七日覆審院判決  
 ○仲裁言渡ヲ取消シ其償ヲ得ントスル訴訟  
 ノ部參觀



第八款 義務仲裁人ノ仲裁言渡書ノ執行

第一條 執行ス可キ豫定ノ法式〇仲裁言渡書ノ附託〇執行ノ示令

第八百二十八節 義務仲裁人ハ真箇ノ裁判官ト之ヲ同視スルヲ得可シ

然リト雖モ義務仲裁人ハ政府ヨリ直接ニ辞令書ヲ授與セラレサルカ故ニ其仲裁言渡書ヲ執行セシムル為メノ充分ナル性ヲ有セサルモノニシテ恰モ好意仲裁人ト同様裁判所

角石

ヨリ執行ノ示令ヲ得ント求ムルトニ逼迫セラル可シ

第八百二十九節 此ニ由テ是レヲ觀レハ義務仲裁人ハ其事務ヲ取扱ヒシ地方ヲ管轄スル

商事裁判所ノ書記局ニ仲裁言渡書ノ正本ヲ納メサル可ラス 商法第六十一條訴訟法第一千二十條

第八百三十節 爾餘ノ裁判所カ其辞令書ヲ附與セシト雖モ敢テ切要ナラス此ニ由テ憶フ

ニ第一千二十條ハ此ノ如キ區別ヲ為サスシテ商法モ亦一ノ例外法ヲ設ケサルカ故ニ該例



外法ヲ適施スルヲ要ス可シ

第八百三十一節 商事裁判所ノ在ラサル地ニ

於テハ仲裁言渡書ノ附託ハ該裁判所ノ職務

ヲ行フ所ノ初告裁判所ノ書記局ニ之ヲ為ス

可シ商法第六百四十條

第八百三十二節 是等ノ規則ハ雙方本人仮令

控訴ヲ抛棄シタルキト雖モ尚ホ敬慎ノ願書

及ヒ破毀ヲ求ムル訴ニ之ヲ當テ用フ可シ此

ニ由テ憶フニ商法第六十一條ニハ如此キ區

別ヲ為サハリキ千八百二十九年四月二十八日、千八百三十二年八月二十八

角石

二日及ヒ十一月二十一日覆審院判決、千八百

三十三年四月十八日巴里、千八百二十九年三

月六日「エ」千八百三十三年四月十八日「エ」

古規則ハ仲裁人ノ指令ヲ命スル商事裁判所

ノ裁判言渡ノ後ニ仲裁人ノ指令セラル、片

ハ殊ニ之ヲ當テ用フ可シ千八百二十九年四月二十八日覆審院

決判

第八百三十三節 仲裁人ニ與ヘラレタル雙方

本人間ニ勸解開慰ヲ為ス可キノ名義ハ古規

則ニ乖戾ヲ生セサルナリ即チ該仲裁人ハ商

業ノ事ニ付テハ裁判官ノ性ヲ保有ス可シ千



百二十年五月七日、覆審院判決、千八百四十  
 四年五月二十二日、リオン、第三千九百三十九年十  
 二月十八日、二月四日、巴里、千八百三十九年一  
 二月二十日、八月八日、グブ、ル、十一月、千八百  
 十六日、リオン、三月、十一月、三月、六月、千八百  
 八十一年、四月、二月、十五日、モ、ロ、ケ、エ、千八百  
 三十五年、五月、四日、覆審院判決、千八百三十三年  
 七月十三日

第八百三十四節 仲裁言渡書ノ如何ヲ問ハス

既決ノ権カヲ得タルト見做サレタル仲裁言  
 渡書ニ依リテ社負等ヲ會社ノ事ヨリ爾餘ノ  
 商業ノ事ニ付キ斯々ノ事件ノ為ノ該社負ノ  
 採用シタル裁判官タル仲裁人ノ面前ニ送致

角石

シタル片ハ此點ニ付キ既決ノ権カヲ得タル  
 モノトス而シテ人或ハ某仲裁人ハ當普通ノ  
 仲裁人ナルカ故ニ商事裁判所長ヨリ發シタ  
 ル執行ノ示令ハ管轄異ナル旨ヲ判決スル  
 ヲ得ス 千八百二十九年四月

第八百三十五節 仲裁言渡書ノ附託ハ該言渡  
 書ノ日附ヨリ三日内ニ之ヲ為サ、ル可ラス

訴訟法第○其他前ノ第六百節參觀

第八百三十六節 然シナカラ此三日ノ期限ハ  
 無効ノ罰ヲ以テ命セララル、所ニ非ラス故ニ



仲裁言渡書ノ附託ハ定期ノ了ハル後ト雖モ  
尚ホ之ヲ為スヲ得可シ千八百十三年三月  
二十一日巴里、千八  
百三十二年六月十二日「グレノール」千  
八百三十二年三月二十九日覆審院判決〇其  
他前ノ第六百節參觀

第八百三十七節 仲裁言渡書ハ一モ更改ナク  
商事裁判所長ヨリ發スル示令ノ底意ニ因リ  
之ヲ執行ス可キモノトス但シ該裁判所長ハ  
其書記局ニ言渡書ヲ納メタルヨリ三日ノ期  
限内ニ單純ニ示令ヲ與フ可シ商法第六  
十一條  
如此キ示令ノ法式ニ付テハ前ノ第六百十節

角石

及ヒ以下ヲ參觀ス可シ

第八百三十八節 所長ハ好意仲裁人ノ場合ニ  
於テル如ク執行ノ示令ヲ發スルヲ辭拒シ  
得可キ乎

商法第六十一條ノ文面ヲ以テ否決セリ即チ  
所長ハ單純ニ示令ヲ與フ可キモノナリ故ニ  
此レハ仲裁言渡書ノ價值ヲ穿鑿スルニ非ス  
シテ所長ノ履行セサル可ラサル所ノ一法式  
ニ過キス而シテ其他義務仲裁人ハ法律上商  
事裁判所ト等シキ順序ニ置ク所ノ裁判所ヲ



構成ス故ニ其仲裁言渡書ヲ取消スルハ所長ノ権内ニ入ル可ラス  
千八百十年七月二十五日「ラ」ニ

第八百三十九節 又仲裁言渡書ハ裁判所ノ簿冊ニ之ヲ寫シ及ヒ尋常裁判言渡書ノ正本ニ之ヲ添附ス可シ  
尚法第六十一條

第二條 執行ノ方法〇管轄權

第八百四十節 義務仲裁人ノ仲裁言渡書ハ好意仲裁人ノモノ、如ク執行セラル可シ〇前ノ第五百九十四節及ヒ以下參觀  
又其仲裁言渡書ハ當然保證人ヲ立ツルノ要

角石

件ヲ以テ假ニ之ヲ執行ス可シ  
千八百十七年四月二日覆審

院判 〇前ノ第二百四十一節參觀

第八百四十一節 然レ氏豫ノ諸般ノ訴訟手續ニ保證人ヲ立ツ可キヲ要トス即チ此訴訟手續ノ後又ハ爭訟ノ後保證人ヲ立ツルヲ得  
千八百二十七年八月二十八日「ボ」ル「ド」控訴院判決書ノ意

第八百四十二節 仲裁人中一名ノ欠席レタル時ノ仲裁言渡書ハ六箇月間之ヲ執行セサルカ為メ訴訟手續ノ取消ヲ受ク可キ乎  
論者或ハ可決レテ曰ク義務仲裁人ノ仲裁言



渡書ハ商事裁判所ノ裁判言渡書ト之ヲ同一  
視ス可シト然ルニ此ノ最終ノ言渡書ハ六箇  
月間停止スルニ因リ訴訟手續ノ取消ヲ受ク  
可シ訴訟法第百五十六條ノ意、高法第百四  
十三條、千八百二十七年二月二十一日「ラ  
ルレアシ、千八百三十九年  
二月二十一日「ボルド」  
然レ氏論者之レニ答ヘテ曰ク雙方本人ハ仲  
裁裁判所ヲ構成スルヲ知ラサルヲ得スト  
何トナレハ本人等自ラ仲裁人ノ指命ニ立會  
ハサルト雖モ裁判所ヨリ其職權ヲ以テ仲裁  
人ヲ撰任スル中ハ掛リ使吏ヲ以テ其旨ヲ本

人等ニ告知ス可クシテ向後對決シタル時ノ  
仲裁言渡書ニ故障ヲ述フルヲ禁スル諸理  
由ノ前ノ第五百二十六節及ヒ第七百九十八  
節參觀ハ訴訟手續ノ取消ト為スヲ除却セ  
サル可ラス而シテ仲裁言渡書ハ常ニ順序此  
語ヲ看ヨノ事ニ付キテノ言渡書ノ如ク對決  
ノモノト見做サル、可シ

第八百四十三節 仲裁言渡書ヲ執行ス可キニ  
管スル爭訟ハ其言渡ヲ為シタル地方ヲ管轄  
スル民事裁判所ニ屬ス可シ此ニ由テ考フル



ニ商事裁判所ハ自己ノ裁判言渡書ノ執行ニ  
付キ判決スルヲ得サルカ故ニ仲裁言渡書  
ノ執行ヲ措置スルヲ得サルヤ言ヲ俟タス  
千八百九年十月  
月十三日ヲシテ

第九款 義務仲裁人ノ酬金

第四百十四節 義務仲裁人ハ酬金ヲ要求ス  
ルノ權利ヲ有スル乎又此者ハ仲裁言渡書中  
ニ酬金ヲ定ムルヲ得可ク或ハ之ヲ要求ス  
可キノ訴權ヲ有スル乎  
總テノ仲裁人ハ真箇ノ裁判官ナリ故ニ雙方

(前石)

本人ハ此者ニ法律上委託セラル、争訟ヲ裁  
判ス可キノ權ヲ除去スルヲ得ス實ニ仲裁  
人ハ商事裁判所ノ附屬吏ニシテ其職務タル  
ヤ該裁判所ノ役員ノ如ク無報タラサル可ラ  
ス然ラサレハ凡ソ商人タル社員ハ普通法ノ  
區域外ニ放置セラレ且ツ佛蘭西ニ於テハ獨  
リ其裁判官ニ給料ヲ拂フニ束縛セラル可  
シ高法第六百二十又此否決ハ一般ニ採用  
セラル、所ノモノナルヤ千八百三十年十一月  
十二年四月二十六日覆審院判決、千八百二十  
七年六月三十日モントパリエール、千八百三十



一年八月二日「リオン」千八百三十六年八月二日「クワシ」千八百七十七年七月二十日「ラシ」千八百三十八年八月二十日「ホルド」千八百四十二年十一月三日「然シナカラ」前ノ第六百三十三節

參觀

第八百四十五節

然シナカラ總テ仲裁人ハ已

レヲ撰命シタル雙方本人ニ對シ其事務ヲ行

フニ付キ出シタル立替金ノ償還ヲ得ンカ為

メニハ連帶ノ訴權ヲ有ス可レ是レ蓋シ通常

或種ノ事務ヲ任セラレタル代理人ニ等シ民法

第十二千二條ノ意、千八百三十一年十一月十七日覆審院判決

決算人タル仲裁人ニ付テモ亦斯ノ如ク裁判

セリ、千八百三十三年一月十七日覆審院判決

第八百四十六節 此訴權タルヤ仲裁人ナル監

定人ニ付テモ矢張連帶ノモノト公告セリ、千

百十三年八月十日「監定人ノ部參觀」

商人ナル社員間ニ起リタル爭訟ニ付キ仲裁

人ヲ指命シタル書類ヲ保有スル監定人商人

ニ非ラスハ立替金及ビ酬金ヲ要求ス可キ

ヲ許ルサル、ナリ、千八百三十三年八月十日「巴里」

第八百四十七節 仲裁人ハ其立替金ヲ擔保ト



シテ雙方本人ヨリ附託セラレタル證書類ヲ  
留置クコトヲ得ス但シ之ヲ為ス片ハ損害賠償  
ノ言渡ヲ受ク可シ全上ノ

第四節 印紙及ヒ登記

第四百四十八節 後節ニ述フル規則ハ仲裁人

ノ二種ニ普通ノモノナリ

第四百四十九節 印紙○仲裁委託契約書ハ仲

裁人ノ調整セル諸證書ノ如ク印紙ニ之ヲ認

メサル可ラス但シ此規則ニ乖戾スル毎ニ二

十コフランノ罰金言渡ヲ受ク可シ共和七年ブ

角石

リユメー<sup>ル</sup>月十三日ノ法律第十二條、第十七  
條、第二十六條等、千八百二十四年六月十六日  
ノ法律第十條

第四百五十節 總テ仲裁人ハ印紙ヲ貼用セサ

ル證書若クハ簿冊又ハ印紙ニ檢印セサル證

書若クハ簿冊ヲ以テ仲裁言渡ヲ為スコトヲ得

ス但シ全上ノ罰ヲ受ク可シ而シテ此規則ヲ

履行セサル場合ニ於テハ又其仲裁人ハ印紙

税ヲモ拂フ可シ共和七年「ブリユメー<sup>ル</sup>月十

三日ノ法律第二十四條、第二十六條



第八百五十一節 登記。○仲裁、委托契約書ハ右ト等レク此法式ニ循フ可シ共和七年「フリメ」ル月二十二日ノ法律第七條

第八百五十二節 仲裁、委托契約書ノ登記ハ仲裁言渡ヲ為ス前ニ之ヲ為サル可ラス全上ハ。法律第四十七條

第八百五十三節 然レナカラ此法式ヲ履行ス可キノ缺欠ハ仲裁言渡書ヲ取消サ、レ氏唯仲裁人ヲシテ諸税ノ全部ヲ辨償セシム可シ第八百五十四節 仲裁、委托契約書ニ税ニ割合

角石

フタル金額即チ價直ヲ辨償ス可キノ義務ヲ毫モ記入セサル中ハ三「フラン」ノ定税ヲ拂フ可シ(午八百十六年四月二十八日ノ法律第四十四條第二)

第八百五十五節 然レ氏二三ノ契約ヲ結ビタル雙方本人ハ若シ他日争訟ハ發起スル「有」ラハ其時ニハ必ラス相共ニ指命シタル仲裁人ノ裁判ヲ受ク可シトノ契約ハ恰モ契約ノ一要件ノ如ク首做サル、ニ過キサル可ラス故ニ毫モ特別ノ税ヲ受ケシメサルナリ



治安裁判所ニ於テ和鮮ノ調書ニ依リ仲裁人  
ヲ指命シタル片ハ毫モ義務ヲ負擔セサルモ  
ノトス  
千八百二十三年十月十日大藏省ノ裁  
決

第八百五十六節 仲裁言渡書ハ勿論之ヲ登記  
ス可ク而シテ該言渡書中ニ記入有ル證書類  
モ亦之ヲ登セサル可ラス  
共和七年「フリメー  
ル」月二十二日ノ法律第十八條而シテ此記載  
方ハ拂フ可キ税金、拂期日及ヒ之ヲ拂フ可キ  
局ノ名ヲ記セサル可ラス然ラサル片ハ收税

備石

吏ハ已レノ局ニ證書ヲ登記セサル以上ハ人  
或ハ登記ノ旨ヲ辨解スト雖モ税ヲ要求スル  
ノ能權ヲ有ス可シ  
企。上。ノ。法。律。第。四。十。八。條

第八百五十七節 如斯キ規則ニ違背スル片ハ  
仲裁人自ラ税ヲ拂フ可キ責ヲ負フ可シ  
共和  
七年「フリメー」ル月二十二日ノ法律第四十七  
條、千八百十六年三月二日大藏省ノ裁決

第八百五十八節 仲裁言渡書ハ其言渡シタル  
處断ノ既ニ登記シタル契約書ニ基因セサル  
片ト雖モ正本ニ之ヲ登記セサル可ラス但シ



副本ニ登記スルニ非ラサルナリ(共和七年「  
リ」月二十二日ノ法律第四十三條、第四  
十四條及ヒ第四十七條、千八百十三年八月三

日覆審院判決

第八百五十九節 然リト雖モ其言渡書ハ登記  
セラル、前ニ之ヲ書記局ニ納ム可シ(訴訟法  
第一千二十條、千八百十五年八月三日覆審院判  
決、千八百八十年十月二十八日司法省ノ書付)  
第八百六十節 然レモ其言渡書ハ此法式ヲ履  
行セサル以上ハ執行ノ示令ヲ得ルヲ能ハス

角石

(共和七年「  
」月二十二日ノ法律第四  
十二條、第四十七條、全上ノ判決)

第八百六十一節 登記ハ仲裁言渡書ト俱ニ登  
記セサル可ラサル附託届書ノ日ヨリ起算シ  
二十日以内ニ要セラル可シ(共和七年「  
」月二十二日ノ法律第二十條)

第八百六十二節 仲裁人ノ證書類及ヒ其仲裁  
言渡書ノ登記税ノ金高ニ付テハ尋常裁判所  
ノ證書類及ヒ其裁判言渡書ノ登記税ニ等レ  
カル可シ(共和七年「  
」月二十二日ノ



法律第六十九條、千八百十六年八月二十八日  
ノ法律第四十四條及ヒ第四十五條○裁判言  
渡書ノ部參觀

第八百六十三節 裁判所ノ書記局ニ為シタル  
仲裁言渡書ノ附託届書及ヒ所長ヨリ發スル  
執行ノ示令ハ各々三「フラン」ノ定税ヲ課セラ  
ル可シ(共和七年「フリメール」月二十二日ノ法  
律第二款第六十八條第六及ヒ第七)  
第八百六十四節 執行ノ示令ニ係ル故障申述  
書ハ一般ニ召喚狀ノ為メニ定メタルニ「フラ

前右

シノ定税ヲ課セラル可シ(共和七年「フリメー  
ル」月二十二日ノ法律第二款第六十八條第一

第五節 文例

第一 文例

私印ノ仲裁委托契約書ノ書式

巴里府「ビュシ」街第五号居住所有者

「ジャン、ゴーチエ」

巴里府「ルイー、ル、グラン」街第十四号居住

商人 「ルイー、ジョセップ、ルブ

ラン」







第三條

其者ハ已レノ任セラレタル日ヨリ起算シ二箇月間ニ仲裁言渡ヲ為ス可キ事若シ期限ヲ定メサルハ三箇月間ニ言渡ヲ為スヲ要ス可キ事

於巴里府右本書ニ通ヲ作ル事

雙方ノ者ノ姓名手署

註。○習慣ニ於テ雙方ノ者ハ一名若クハ三名ノ仲裁人ヲ以テ仲裁裁判所ヲ編成スルヲ約ス○雙方ノ者各自ノ仲裁人ヲ指命ス

角石

ルニ至ラハ太々著シキ不都合ヲ生ス可シ  
○前ノ第六百八十七節

第四條

仲裁人ノ説互ニ相異ナル場合ニ於テハ此者ハ自己ノ説ヲ決定セシムル為メ第三ノ仲裁人ヲ任スルノ權ヲ有ス可キ事○左モナケレハ第三ノ仲裁人ハ裁判所長ヨリ撰任セラル可キ事

附言○此裁判所長ヨリ撰任セラル、ノ箇條無キハ雙方ノ者ノ目的ハ數々欠缺



スルナラン

註。○仲裁委託契約書中ニ記入スル仲裁ニ任  
スルヲ述フル箇條ハ覆審院及ヒ數多ノ  
王法院ヨリ無効ナルモト宣告セラルレ  
ハ最早之ヲ用ヒサルト適宜ト稱ス可レ○  
前ノ第百四十八節參觀  
控訴、破毀、管轄權、裁判言渡書、故障申述、敬慎ノ  
願書、裁判言渡ヲ取消シ其償ヲ得ントスル訴  
訟、職業免許、稅度量等ノ部ヲ參觀ス可レ

角石

裁判官ノ仲裁人ノ職ニ任スル事○或ル場合ニ

於テ裁判官、單タ己レノ本心若クハ公義ニ從  
ヒ又ハ簡單ナル事實ノ推測ニ依リ以テ裁判  
言渡ヲ為ス可キノ權ヲ屬セラル、ヲ云フ

第一 故ニ法律ハ左ノ諸件ノ如キ問題ニ付キ

裁判言渡ヲ為スニ關スルハ裁判官ノ智  
慧及ヒ本心ニ任ス可レ

一 住所 民法第百五條

一 失踪 第百十七條

一 暴行又ハ錯誤 第百四十六條、第百八十條



及々第千百九條

一 養料(第百八條)

一 苛虐又ハ誹謗(第百三十一條及々第三

百六條)

一 相續人ノ證書(第七百七十六條及々第七

百七十九條)

一 隱匿シタル瑕疵(第千六百四十一條)

一 社員間ノ分ケ前ノ規定(第千八百五十四

條)

一 後見ヲ免脱シタル幼者ノ結ヒタル契約

(角石)

ヨリ生スル損害(第四百八十四條)

一 水流(第六百四十五條)

一 結約者ノ意思ノ解釋(第千五百十六條)

一 借主ニ與フ可キ期限(第千九百條)

其他破毀、解釋、裁判官ノ意欲ニ任セタル權利

ノ部ヲ參觀ス可シ

報告、仲裁人。○計算書、證書及々簿冊ノ檢視ヲナ

ス為メ商事裁判所ヨリ雙方本人ヲ廻送スル

所ノ第三ノ人ヲ報告、仲裁人ト云ヒ或ハ「ヨム



ミ。セ。ル。委  
算ト云フ

概略表

承諾

二十九

所為(要求スル)

十七

吟味席

九、二十

意見

二、二十三及七以下

意見書

五

代言人

五

代書人

二十二

控訴

角石

報告

二十

計算

二十六

和解

二

禁錮

三十四

期限

九、二十七

會議

二十三

納完

十五、二十二

勤勉

十九

證人吟味

七

登記

三十六



送達

二十

監定人

二十四、三十及以下

書記局

十五

酬金

三十二

管轄

三十三

裁判官

一

怠懈、答

二十一

負數

十一及以下

指命

八及以下

期限

九

無効

十八、二十一及以下

申立書

十五

告知

二十

効果

二十四及以下

故障申述

二十七及以下

留置

三十五

誓詞

十三及以下

姓名手署

十八

告知

二十

催促書

十九



民事裁判所

五

商事裁判所

四、及七以下三十三

第一節 報告仲裁人ハ尋常仲裁人ノ如ク雙方

本人ヨリ撰擇セル特別ノ裁判所ヲ構成セス

故ニ裁判ス可キノ職任ヲ有セサルモノトス

第二節 其者ハ雙方本人ノ述フル所ヲ聽キ務

メテ之ヲ和解セシム可ク若シ此者ヲ和解セ

シムルヲ得サル片ハ爭訟ニ付キ自己ノ意

見ヲ申述セサル可ラス  
訴訟法第四  
百二十九條

角石

第三節 往古巴里府ニ於テ實行セラレタル和

解仲裁人ヲ任スルノ習慣ハ有益ナル効果

ヲ生セシメタリ而シテ法典ハ其習慣ヲ保全

ス夫レ如此キ仲裁人ハ親族裁判所ノ類ニシ

テ常ニ和解ニ至ラサルト雖モ責メテハ爭訟

ヲ減少シ或ハ之レカ判決ヲ容易ニ為ス可シ

第四節 然シナカラ此能權ハ商事裁判所ヨリ

特別ナルモノナリ

第五節 又其能權ハ要アル片ハ民事裁判所ヨ

リ代書人又ハ代官人ノ面前ニ仲裁人ヲ廻送



スル片ニ其用フル和解及ヒ規則外ノ方法ト  
之ヲ混同ス可ラス

第六節 商事裁判所ハ訴訟法第四百二十九條  
ニ揭示無キニ三ノ場合ニ於テ報告仲裁人ヲ  
任命スルヲ得可シ此ニ由テ憶フニ既ニ説  
述シタル迅速ノ趣意及ヒ和解ス可キノ希望  
ハ爾餘ノ事件ニ之ヲ當用セララル可シ

第七節 然レモ古裁判所ハ報告仲裁人ヲシテ  
證人ノ述フル所ヲ聽カシムル為ノ代理ノ任  
ヲ與フ可キノ職權ヲ有セサル可シ○證人吟

角石

味ノ部參觀

第八節 指令○仲裁人ハ裁判所ヨリ指令セラ  
ル可シ但シ雙方本人吟味席ニ於テ仲裁人ヲ  
指令スルヲ約セサル片ハ格別ナリトス

法第四百二十九條

第九節 雙方本人ハ監定人ノ場合ニ於ケル如  
ク仲裁人ノ撰擇ヲ為スニハ三日ノ期限ヲ有  
セサル可シ○商事裁判所ノ部第百節參觀  
指令ハ吟味席ニ於テ之ヲ為ス可シ

九條

訴訟法第四百二十九條



第十節 然リト雖モ雙方本人ハ吟味了リテ後  
裁判官ノ指命セシ和解仲裁人ヨリ爾餘ノ和  
解仲裁人ヲ擇ムトヲ得可シ然レモ此撰擇ハ  
裁判所ノ認可ヲ受ケサル可ラス○監定人ノ  
部第三百二十三節參觀

第十一節 一名若クハ三名ノ報告仲裁人ヲ指  
命セサル可ラス 訴訟法第四  
百二十九條

其仲裁人ノ負數ヲ定ムルトハ裁判所ノ獨裁  
ニ委子タリ 千八百十二年八  
月十七日ラシム

第十二節 如此キ仲裁人ハ奇數ニ有ルヲ得ス

此ニ由テ考フルニ該仲裁人ハ裁判言渡ヲ為  
ス可ラス唯自己ノ意見ヲ述フ可キカ故ニ相  
互ニ説ノ分派スルト莫カル可シ

第十三節 總テ仲裁人ハ一般ニ誓詞ヲ宣述ス  
ルトヨリ免脱セラル可シ

第十四節 然レモ仲裁人ノ職務カ默許ニ監定  
人ノ事務ヲ包含スル片ハ此者ヲシテ誓詞ヲ  
宣述セシム可キ乎○監定人ノ部參觀

第十五節 法式○若夫レ報告仲裁人雙方本人  
ヲ和解セシムルトヲ得サル片ハ裁判所ノ書



記局ニ納完スル申立書ニ自己ノ意見ヲ述フ

可シ訴訟法第四百二十九條、第四百三十一條

第十六節 此申立書ニ付テハ商事裁判所ヨリ特

別ナル組立ヲ以テ雙方本人ヲ和解ス可キ以

上ハ尋常裁判所ニ於テ監定人ノ為メニ規定

シタル規則ニ循フ可シ

第十七節 雙方本人ハ仲裁人ヲシテ時月ヲ消

過シ且ツ出費ヲ要スル或ル法式ニ依ラサラ

シタルノ所為ヲ裁判所ニ要求スルヲ得

可シ

角石

第十八節 申立書ハ縦令幼者ノ之レニ姓名ヲ

手署スル旨ヲ辭避スト雖モ無効ヲ致ス可ラ

ス訴訟法第四百十六條ノ意、千八百二十五年

第十九節 最モ勤勉ナル本人ハ出席ノ催促書

ヲ作為ス可シ

第二十節 此本人ハ其相手方ニ申立書ヲ送達

ス可シ但シ該相手方書記局ヨリ其申立書ノ

報告ヲ得ルヲ承諾スルハ格別ナリトス

巴里府ノ習慣ニ於テハ申立書ハ一方本人ヨ

リ相手方ニ之ヲ送達ス可ラスレテ封印ノ儘



書記局ニ納ム可シ而シテ適法ニ出席シタル  
相手方ト本人ノ目前ニテ吟味席ニ於テ開封  
セラル可シ即チ裁判所ハ雙方本人ノ申立書  
ノ報告ヲ得ルニ至ル迄吟味席ヲ閉ツ可シ  
第二十一節 若シ訴訟ヲ起サ、ル本人ハ裁判  
所ニ於テ申立書ノ辨論ノ趣意ヲ考察シ之ヲ  
討論ス可キノ位置ニ居ラサレハ即チ言渡書  
ノ無効ヲ致ス可シ

第二十二節 仲裁人ハ其申立書ヲ裁判所ノ書  
記局ニ納完スル代ニ吟味席ニ於テ之ヲ讀ミ

角石

上ケタルニ因リ生スル無効ハ先ツ之ヲ覆審  
院ニ控訴ス可ラス此ニ由テ考フルニ此規則  
ニ乖戾スルトハ蓋シ秩序ヲ害スルニ至ラサ  
レハナリ 千八百三十三年五月七日  
覆審院判決  
第二十三節 然レ氏仲裁人ハ裁判所ノ會議ニ  
参加スルヲ得ス

第二十四節 何レノ場合ヲ論セス此申立書ハ  
裁判所ノ其至當ト考フ可キモ敢テ之ヲ束縛  
セサルナリ 訴訟法第三百  
二十三条ノ意  
此レハ監定人ノ申立書ト等シク簡單ナル意



見書ナリ

第二十五節 此意見書ニハ仲裁人ニ委託セラレタル諸般ノ箇條ニ付キ可決又ハ否決ノ旨ヲ記セサル可ラス但シ單一ナル想像説ヲ以テ記スルヲ得ス千八百二十七年五月二十ニ日ブリユキユスゼール

第二十六節 仲裁人若シ計算ヲ定ムル為メ指命セラレタルキハ裁判所ヲシテ充分ニ事情理由ヲ考察セシムル為メニ此計算ニ付キ雙方本人間ニ起リタル爭論ヲ申立テサル可ラ

角石

第二十七節 故障申述。○仲裁人ニ付キ故障ヲ述フルトハ此者ヲ任シタルヨリ三日内ニ之ヲ為ス可シ訴訟法第四百三十條 ○監定人。故障申述ノ部參觀

第二十八節 此三日ノ期限トハ雙方本人立會ノ上仲裁人ヲ任スル裁判言渡ヲ為シタルキハ其日ヨリ之ヲ算始ス可シ若シ又一方本人抗傳シタルキハ言渡書ヲ送達シタル後一日ヨリ算始ス可シ訴訟法第四百三十五條

第二十九節 仲裁人ニ付キ故障ヲ述フルトハ



裁判所ヨリ仲裁人ヲ任シタル場合ニ於テ之  
ヲ為ス可シ而シテ雙方本人ノ一方ハ其相手  
方ノ仲裁人ヲ任スル旨ヲ承諾シタルキハ故  
障ヲ述フルヲ得ス

第三十節 故障ヲ述フ可キ方法ハ監定人ニ對  
スルト同様ノモノタリ○然シナカラ此故障  
ヲ述フル旨ハ召喚狀ヲ以テ被告人ノ任所ニ  
告知セラル可シ

第三十一節 故障申述ノ原由及ヒ其効果ニ付  
テハ監定人ノ部ヲ參觀ス可シ

角石

第三十二節 酬金○報告仲裁人ハ酬金ヲ要求

スルヲ得可シ即チ此者ハ裁判官ヨリ任せ  
ラレタル真箇ノ監定人ナレハナリ 千八百二

月二十四日「モントペリエール」千八  
百二十六年一月十四日「ボルドー」

此酬金ハ習慣ニ於テ仲裁人ノ為メニ決シテ  
辭避セラレス

第三十三節 仲裁人ノ行為ハ之ヲ撰任シタル

商事裁判所ノ管轄スル所ナリ 千八百二十八年八月三十日

「リオン」控訴院  
判決書ノ意

第三十四節 申立書ノ費用及ヒ酬金ヲ辨償ス



可キノ處罰ハ禁錮ヲ命ス可ラスト裁判セリ  
千八百二十六年  
七月十二日巴里

第三十五節 仲裁人ハ已レニ酬金ヲ受取ラン

トノ口實ヲ以テ證書類ヲ留置クヲ得スハ千

百三十九年十月

第三十六節 登記。○仲裁人ノ申立書ハ裁判所

ニ於テ之ヲ用フルル而已簿冊ニ登記セラル

可シ

529

司法書文庫  
第529號

角石

司  
法  
書  
庫





2



1  
2  
3



